

2013年度 修士論文

子どもの運動・スポーツ行動に対する母親の
支援態度に影響を及ぼす要因の検討
—母親の運動・スポーツ価値意識に着目して—

A study of factors affecting the mother's support
attitude against the children's exercise and
sports activities for children
: a focus on the mother's value consciousness of
exercise and sport :

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 スポーツビジネス研究領域

5012AO16-7

木村 圭佑

研究指導教員： 木村 和彦 教授

目次

第一章 序論	1
第一節 はじめに	1
第二項 子どもの体力と親の影響の関係について	3
第二章 先行研究の検討	7
第一節 子どもの体力に関する先行研究	7
第二節 親の運動・スポーツ支援態度に関する研究	8
第三節 運動・スポーツ価値意識に関する先行研究	12
第三章 研究目的	15
第四章 研究方法	16
第一節 研究の枠組み	16
第二節 調査方法	17
第一項 運動・スポーツ価値意識測定尺度の作成	17
第二項 運動・スポーツ支援態度測定尺度の作成	18
第三項 運動・スポーツ行動の測定	20
第五章 予備調査	22
第一節 調査概要	22
第二節 調査項目	22
第三節 分析方法	22
第四節 結果	23
第一項 基本的属性	23
第二項 運動・スポーツ価値意識測定尺度の検討	23
第三項 運動・スポーツ支援態度測定尺度の検討	26
第五節 考察	29
第六節 運動・スポーツ価値意識測定尺度の再検討	30
第六章 本調査	31
第一節 調査概要	31
第二節 調査項目	31
第三節 分析方法	32
第四節 結果	33

第一項 基本的属性	33
第二項 運動・スポーツ支援態度測定尺度の再検討	34
第四項 調査Ⅰ：一般的価値意識	39
第五項 調査Ⅱ：参与形態別価値意識	40
第六項 考察	42
第七章 結論	46
第一節 まとめ	46
第二節 研究の限界	47
第三節 今後の課題	47
参考文献	49
謝辞	64

第一章 序論

第一節 はじめに

現在、子どもの体力低下が問題視されている。文部科学省が毎年行っている「全国体力・運動能力調査」によると、子どもの体力は昭和 60 年頃をピークとしてほとんどの種目において下回っていることが報告されている。文部科学省が平成 24 年度に行った「全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果」⁵⁸⁾では、新体力テストのうち反復横とび以外の種目では 50%以上の児童が昭和 60 年度の平均値を下回っていたことが報告された。また、体力の低下により自分の体をうまくコントロールすることができず、スキップができない、靴ひもが結べない、転んだときに手を付けず頭から転んでしまうなどといった事例も報告されており、体力低下による影響が様々指摘されている。

体力は、「行動体力」と「防衛体力」から構成されるというのが一般的である。猪飼(1973)¹⁸⁾によると『「行動体力」は身体運動のために必要とされる身体的要素と精神的要素から構成され、『防衛体力』とはウイルスなどの外界からの侵襲、温度変化・身体的・精神的ストレスから体を守る免疫系、自律神経系、内分泌系から構成される』と言われており、体力にも 2 種類存在することが指摘されている。現代の子どもが体力の低下が問題視されているのは、主に新体力テストによって測定される「行動体力」だけでない。中村(2004)⁴²⁾が指摘するように、病気から自分の身を守るための「防衛体力」も低下していると言われている。

このような体力低下という問題が発生した原因について、中央教育審議会の「子どもの体力向上のための総合的な方策について」(2002)³⁷⁾は「保護者をはじめとした国民の意識の中で、子どもの外遊びやスポーツの重要性を軽視するなどにより、子どもに積極的に体を動かすことをさせなくなった。」ことや、「スポーツや外遊びに不可欠な要素（時間、空間、仲間）の減少」などを指摘している。これは、子ども側だけの理由ではなく、保護者にも理由があると考えられる。例えば、安全な場所でしか子どもを遊ばせなかったり、遊ぶ場所がなければテレビやゲームを与えることで、子どもの遊ぶ場所や仲間を減少させている

ことや、より偏差値の高い学校に入学させるために学習塾に通わせることで、子どもの遊ぶ時間を減少させるなど、社会的な環境による原因だけでなく保護者による3つの間の現象も引き起こされていることが考えられる。

さらに、体力低下が引き起こす問題について中央教育審議会答申「子どもの体力向上のための総合的な方策について」(2002)³⁷⁾では、子どもの体力低下が引き起こす影響を「豊かな人間性や自ら学び考える力、健康面や精神面といった『生きる力』の低下に繋がるものであり、単なる運動面への影響だけではない。体力低下は子ども自身への影響だけでなく、将来的に国民全体の体力低下に繋がるものであり、生活習慣病の増加やストレスに対する抵抗力の低下など心身の健康に影響を与え、社会全体の活力の低下に繋がることや、体力が低下することは将来を担う人材の育成を妨げる重要な問題」と述べている。このように、子どもの体力低下は単なる運動能力の低下のみならず、今後の日本の将来にも大きな影響を与えることが指摘されており、子どもの体力を向上させることは急務である。

子どもの体力低下に対して、これまで学校教育の現場や地方自治体、民間団体等によって様々な取り組みが行われてきた。自治体での取り組みでは、例えば福岡県は「福岡県子どもの体力向上広場」⁴⁷⁾というホームページを作成し子どもの体力を向上させるための運動などを紹介する取り組みを行っている。また、東京都や横浜市のように子どもの体力を向上させるための計画や方針を策定する自治体など、様々な取り組みを行っている自治体が多く見られる。国においても、先述した中央教育審議会答申「子どもの体力向上のための総合的な方策について」(2002)³⁷⁾の中で子どもの体力向上を促す総合的な対策を提唱し、その中では体力向上キャンペーンの実施やスポーツ選手ふれあい指導事業、生活習慣改善などの対策案を具体的に提示するなどの取り組みを行ってきた。しかし、2012年に策定されたスポーツ振興基本計画⁵⁷⁾でも「平成13年以降は低下に歯止めがかかってきているが、依然として昭和60年頃よりも平均身長や体重は昭和60年頃よりも上昇している一方で、体

力が低いという問題は解決できていない。」と述べられているように、子どもの体力の低下という問題が依然として解決していないのが現状である。

文部科学省が作成した、「子どもの体力向上のためのハンドブック」(2012)⁵⁹⁾によると、近年では子どもの体力を向上させるための取り組みとして「『地域・学校・家庭』が協力して取り組みを行うことが重要である」ことが指摘されている。

文部科学省が毎年実施している「全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果」^{56),58)}の中で紹介されている「取組事例集」によると、3者の連携を目的とした取り組みを行う自治体も多数見られる。さらに、「子どもの体力向上のための取組ハンドブック」(2012)⁵⁹⁾によると、「すでにこれまでの全国体力調査で、家庭や地域、及び学校との連携が子どもの体力向上に大きな影響を与えていることがわかった。」と結論づけているように、3者がそれぞれ単独で取り組みを行うのではなく、3者が連携することで子どもの体力向上に良い影響を与えることができると考えられてきている。

第二項 子どもの体力と親の影響の関係について

前述した「学校・家庭・地域」の連携の中でも、特に家庭での取り組みは重要だと考えられる。学校以外の時間や、長期休暇中などは特に家庭で過ごす時間が多く、学校以外で子どもが最も過ごす時間が長い場所である。幼少期から小学校低学年頃までは子どもは多くの時間を家庭で過ごし、子どもにとって家庭が生活の基盤となっている。さらに、子どもの体力には親の影響が大きいことは明らかにされており、子どもの身体活動増強を目的とした保護者のサポートについて研究をした木下ら(2008)²⁷⁾も「『学校・地域・家庭』の中でも子どもに及ぼす影響が大きいとされる家庭からのアプローチは特に重要な役割を果たすと考えられる。家庭、特に保護者からのサポートは、人的・経済的コストの面を考慮しても非常に効率的な方法であると言える。」という指摘をしているように親の影響は家庭の

取り組みの中でも重要なものであり、子どもの体力を向上させるための手段としても有効であると言える。

子どもの体力に対して親が影響を与えることはこれまで明らかにされてきたが、一方でその影響を与える親自身の態度にどのような要因が影響を与えているのかといった研究はこれまでほとんどされてこなかった。教育の分野でも同様の指摘がされており、村木(2004)⁵⁴⁾は、「養育態度の規定因については多くの研究が行われている。しかしながらこれまでの研究はとりわけ母親の養育行動が子どもの発達をいかに規定するかという側面に主たる焦点を当てたものが多く、母親自身の内的意識を大きく扱ったものはほとんど見られない。」と指摘し、影響を与える要因として価値意識・目標志向性に着目し、それらが母親の養育態度にどのように影響を及ぼすのか検討を行った。教育学の分野におけるこのような指摘は、スポーツ経営学でも同様の指摘をすることができるだろう。体育・スポーツ経営の分野では養育態度ではなく、「子どもの運動・スポーツに対する支援態度(以下、支援態度)」に焦点を当てた研究が主にされてきた。養育態度とは現代保育用語辞典(1997)²²⁾によると「親が子どもを育てるに当たって意図的あるいは無意図的に取る一般態度・行動のこととされる。」とされており、子育て全般に対する態度であると言える。運動・スポーツ場面に特化した親の態度としては養育態度ではなく、支援態度に焦点が当てられてきた。これまでの研究では、親の支援態度が子どもの運動・スポーツ行動や身体活動量に影響を与えることが明らかにされてきた。だが、支援態度がどのような要因に影響を受けているのかといった研究はほとんど見られない。

体育・スポーツ経営とは八代・中村(2002)⁶¹⁾によると「人々のスポーツ行動の成立・維持・発展に必要なスポーツそのものおよびスポーツにかかわる環境条件を提供する社会的営み」⁶¹⁾であるとされている。これを参考にすると、子どもにとってのスポーツ経営とは、子どものスポーツ行動を成立・維持・発展させるために、スポーツをする場所やプログラム、社会的・経済的にも自立ができていない子どもを支え、最も近い存在である親の影響や支援

といった環境条件を提供する社会的営みとすることができる。親の支援とは道具を買い与え、クラブの会員費などのあらゆる費用の支払い、子どもが運動・スポーツを実施する場所までの送迎と言った様々なものが含まれる。親のこのような支援なしには子どもの運動・スポーツは成立し得ないはずである。教育の分野で前述した村木(2004)⁵⁴⁾が指摘したように、スポーツ経営の分野においても子どものスポーツ行動を成立させるために、子どもの運動・スポーツ行動に影響を与える親の内的意識が子どもの運動・スポーツ支援態度にどのような影響を及ぼしているのか検討する必要があるだろう。影響を与える要因について検討することで、子どものスポーツ行動を成立させるために、親の支援に対して働きかけを行っていくことも今後必要になっていくことが考えられる。そこで、本研究では親の支援態度、特に子どもに最も近い存在である母親の支援態度に着目し研究を行うこととした。

また、本研究では支援態度に影響を与える要因として特に母親の子どもの運動・スポーツに対する価値意識に着目した。先行研究(Stewart,2003; Janie,2013)^{7),12)}では、親が子どもが運動・スポーツをすることをどの程度重要だと考えているかを示す「parental importance」と、親自身がどの程度運動・スポーツを楽しんでいるかを示す「parental enjoyment」といった項目が親の支援態度に影響を与えていることが明らかにされているが、これらは親自身の運動・スポーツに対する態度や意識である。しかしながら、「parental importance」や「parental enjoyment」以外の運動・スポーツに対する態度や意識については十分に検討されてこなかった。また、Stewart(2003)¹²⁾や Brustad(1996)²⁾が「子どもの身体活動には親の身体活動に対する信条が影響を与えている」と指摘したことからも、価値意識が支援態度に影響を与えている可能性があるかと推察される。

母親の子どもに対するスポーツ価値意識に着目するにあたり、本研究では永吉ら(1986)⁴³⁾が行ったスポーツ価値意識の定義を参考に「個々の主体が、価値判断を要請されている多くの子どもがスポーツをすることに関わる事象、スポーツの性質機能などについて下

す、明示的(調査においては黙示的価値判断というまでもなく顕在化されない)価値判断の総体によって構成されるもの」とした。

また、支援態度とは、本研究においては母親が子どもが運動・スポーツを実施する際に支援する様々な行動のこととした。具体的には、身体を動かすように言語的・非言語的に促す行為や、子どもが身体を動かすための環境を作ることなどが挙げられる。

第二章 先行研究の検討

第一節 子どもの体力に関する先行研究

子どもの体力には日常的な身体活動量や運動実施頻度などが大きく影響を与えていることから、子どもの体力に関する研究では従属変数を体力テストの結果だけでなく、子どもの身体活動量や運動実施頻度などを従属変数とした研究が多く行われてきた。

子どもの体力に関する先行研究は、大きく2つに分類することができる。1つは、学校や地域でのスポーツ教室の開催や、学校体育授業の工夫などを行うことで、子どもが体を動かす機会を実際に作り、その効果を検証する研究である。もう1つは子どもの身体活動に影響を与える要因の検討に関する研究である。前者は主に縦断的な研究として行われ、例えば若吉ら(2005)⁶³⁾の放課後にスポーツ教室を開催し、子どもの新体力テストの結果の経年的変化を研究したものや、中学生を対象にしたものでは中西ら(2011)⁴⁰⁾の授業時間の増加が体力に与える影響について検討したものなどが挙げられる。多くの研究では、子どもや親子を対象としたプログラムの実施や学校体育授業の工夫は子どもの体力向上にポジティブな影響を与えていることが明らかにされている(阿部ら,2008; 三村ら,2007; 梅原ら,2006; 杉山ら,2008)^{17),21),31),53)}。しかし、これらの縦断的な介入研究では中西ら(2011)⁴⁰⁾の指摘するように介入群と統制群が用意されていない研究も散見され、プログラムの効果が十分に検討されていないことが指摘できる。さらに、本来こういったスポーツ教室や、学校体育授業の工夫などの取り組みは実際は各学校や地域の実情に合わせて行われなければならない。その点を考慮すれば、こういった縦断的研究で検証されたプログラムは各地域の実情に合っているか、あるいは検証したプログラムの普及に関する検討は十分されておらず、再現性は高いとは言えないだろう。日本学術会議(2011)⁴⁴⁾の「先行例やエビデンスを個々の現場が活用しようとする際の大きな問題点として、取り組みの現場の数は膨大であり、他の現場の状況の把握、取り組み内容の設定の根拠データや専門家の助言などの質、量、入手の難易度などには大きなばらつきがある」という提言にある通り、様々な取り組

みが行われる昨今においてどれを参考に取り組みを行うべきか判断するのは困難なことがある。一方、後者は縦断的及び横断的研究として行われてきた。子どもの体力に影響を与える要因として、「有能感、セルフエフィカシー、行動変容理論、親の要因、生活習慣」などといった要因が検討されてきた(武田,2005; 上地ら,2003; 波多野ら,2006; 小澤ら,2007; 木下ら,2008; Levent ら,2012; 久崎ら,2012; 高井,2005; Stewart,2011; Philip White,2012; 松平ら,2010)^{10),11),14),24),25),26),27),32),33),45),46),48)}

このような子ども身体活動量に影響を与える様々な要因の中でも親の影響は注目が高く、様々な研究が行われてきた。親が影響を与える要因については、親の身体活動量や運動実施頻度、親の運動経験、親の収入といった要因について検討されてきた。中でも親の子どもの運動・スポーツに対する支援態度は子どもへの影響が大きいとされ、注目されてきた。

子どもの体力に影響を与える要因の検討に関する先行研究では主に「子どもの身体活動に何が・どのように影響を与えているのか」という点に焦点が当てられてきた。しかしながら、影響を与える要因をどうマネジメントするかという議論は十分とは言えない。今後、子どもの体力を向上させていくために、子どもの身体活動量に影響を与える要因をどうコントロールしていくのかという議論も必要であると考えられる。

第二節 親の運動・スポーツ支援態度に関する研究

親の支援態度に関する先行研究では、これまで主に親の支援態度が子どもの体力や身体活動量、運動・スポーツ行動にどのように影響を与えるのかという研究が行われてきた。例えば「encouragement」「involvement」「facilitation」「model」という支援態度の分類を用いて保護者サポート尺度を作成し、保護者の「モデル・参加」は子どもの身体活動水準に及ぼす影響がそれほど強くなく、子どもの身体活動水準を上げるためには保護者の「励まし・促進」がより重要である可能性を指摘した木下ら(2008)²⁷⁾の研究が挙げられる。また、近藤ら(2003)²⁹⁾は親のサポートを「心理的サポート」、「送迎サポート」、「モデリングサポー

ト」の3種類に分類し、それぞれの子どもの身体活動量に与える影響を明らかにした。また、近藤らはそれぞれのサポートに対する子どもの認知と親の認知の一致度について相関係数を算出することで明らかにした研究を行い、子どもと親の認知が一致していることを明らかにした。海外では「Parental Support」という言葉を用いて数多くの研究が行われてきた。Stewart(2011)¹⁴⁾は親の身体活動の影響、子どもの身体活動に対する親のサポート、parenting style、family cohesion on child and adolescent activity behavior に関する103の先行研究のレビューを行った。そのうち、71個が親のサポートに関する先行研究となっており、親のサポートは子どもの身体活動に一貫してとても重要であり、ポジティブな関係を持っているという結果が示された。また、そのうち60本の研究が横断的、11本が縦断的な研究であったと報告している。また、Stewart(2011)¹⁴⁾は親のサポートは「Informational support, Emotional support, Appraisal support, Instrumental support」の4つに分けられるとしている。これらの先行研究から、親の支援態度が子どもの身体活動量に良い影響を与えていることが明らかにされている。

また、親の支援態度を利用して子どもの身体活動を予測したり、説明するためにモデルの作成を行う研究も盛んに行われている。例えば Stewart(2003)¹²⁾は親の身体活動に関する態度と子どもの身体活動に対する支援が、子どもの身体活動量とセルフエフィカシーに影響を与えていることを図1に示すモデルを用いて検討し、親の支援態度が子どもの身体活動に対するセルフエフィカシーに影響を与えることを明らかにした。

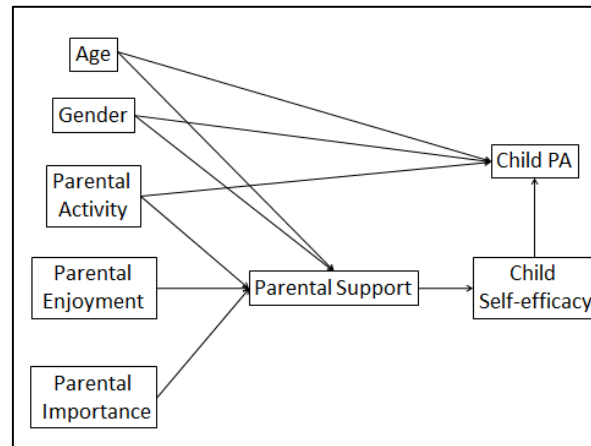


図 1. Standardized parameter estimates for proposed theoretical model

(Stewart 2003)

また、Janie ら(2013)⁷⁾は、7~9 歳の子どもに適した親の影響を描いたモデルの作成を行った。図 2 及び図 3 に示すように男女別にモデルを示し、親の支援態度が子どものセルフエフィカシーに影響を与えることを明らかにした。Janie ら(2013)⁷⁾は子どもの身体活動に影響を与えるためには、年齢に適した情報を親に与える必要があるとしており、7~9 歳の子どもの身体活動を促進するためのモデルである YCM(Young Child Model)を作成した。さらに、7~9 歳の子どもに対する親の影響は、他の人々と異なることを指摘した。また、YCM は幼少期から思春期にかけて親子関係がどのように発展していくのか理解するのに良く使われ、親のサポートは子どものセルフエフィカシーに影響を与えることで、子どもの身体活動に対する障害を乗り越えられる可能性についても指摘している。

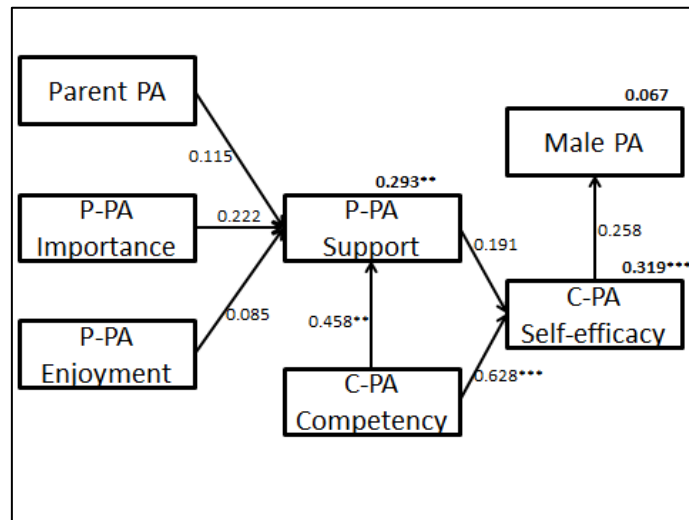


図 2 Young Child Model-Boys(Janie,2013)

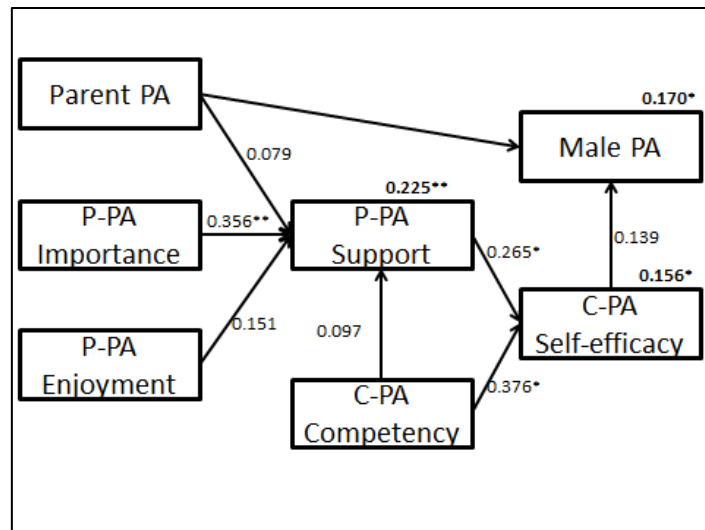


図 3 Young Child Model-Girls(Janie,2013)

他にも子どもの身体活動と親のサポートを含めたモデルの作成を行った研究は海外において数多く行われ、「Parental Support」が子どもの身体活動や子どものセルフエフィカシー、有能感に影響があることが明らかにされてきた。

また、海外の研究においては「Parental Support」に関する研究の多くで「Parental Support」に影響を与える要因として親自身がどの程度身体活動を楽しんでいるのかという「Parental Enjoyment」と子どもが身体活動を行うことがどの程度重要だと考えているの

かという「Parental Importance」が含まれて研究を行っているものが数多く見受けられる。それらの先行研究によると、「Parental Enjoyment」「Parental Importance」は「Parental Support」に影響を与える要因であるということが明らかにされている。

第三節 運動・スポーツ価値意識に関する先行研究

価値意識に関する研究について、これまで多くの研究では、見田(1966)⁵¹⁾の価値意識の理論を参考に研究が行われてきた。見田はその中で、価値を「主体の欲求を充たす、客体の性能」、価値意識を「個々の主体が多くの客体に下す、明示的もしくは黙示的価値判断の総体」と定義をした。

これまで日本における運動・スポーツ価値意識に関する研究で最も引用されているものは、上杉(1985)、上杉(1986)^{19),20)}の行った一連のスポーツ価値意識に関する研究である。上杉は競技者の価値意識を「手段—目的」「禁欲—即時」の2軸で表し、価値意識を「レクリエーション型」、「レジャー型」、「世俗内禁欲型」、「アゴン型」の4つに分類を行った。また、価値意識に関する研究では、YSVQ(The Youth Sport Value Questionnaire)尺度を作成した Lee(2000)⁹⁾の研究も挙げられる。上杉(1985)¹⁹⁾や Lee(2000)⁹⁾の研究を参考にした研究も多く行われてきており、例えばフィットネス会員と地域スポーツクラブ会員の価値意識を比較した田島(2003)³⁴⁾や、大学生のスポーツ価値観を価値体系から明らかにした三戸(2003)⁵²⁾などが研究を行ってきた。

青木(2003)¹⁶⁾は「スポーツそのものに内在する意味・価値やスポーツ実施上の態度・価値意識に焦点を当てており、スポーツの相対的な意義や価値に焦点を当てたものでない。」と先行研究の問題を指摘し、「スポーツの価値性」「スポーツマンの卓越性」「スポーツの非低俗性」スポーツ観測定尺度を作成して運動部に所属する高校生と文化部に所属する高校生のスポーツに対する価値観を比較する研究を行った。その結果、運動部所属群が非所属群及び文化部所属群に比べ、スポーツ観、スポーツの価値性、スポーツマンの卓越性、スポ

ーツの非低俗性の得点が高いという結果が得られた。しかし、青木以降の研究においても実施者を対象とした研究が多くを占めており、非実施者や日常的にスポーツに参加しない者を対象とした価値意識に関する研究の蓄積は十分とは言えない。

田島(2003)³⁴⁾が「スポーツを少しでも行うか、あるいはスポーツについて少しでも知識のある人間は、スポーツに関する価値意識を持っている」と指摘している通り、スポーツ価値意識を持つのは競技者や日常的にスポーツを実施する人に限らない。さらに、「子どもが運動・スポーツをすること」への親の価値意識について研究したものは見られない。子どもの体力低下に対する様々なアプローチが行われている今、子どもの身体活動量を上昇させるために親の運動・スポーツに対する価値意識を明らかにする必要があるだろう。

また、これまでの価値意識に関する研究はほとんどが「する」スポーツに対する価値意識に関する研究であった。「する」以外の価値意識に着目した研究としては、小泉・伊藤(2004)²⁸⁾の大学生のスポーツ行動の価値意識に着目した研究がある。小泉・伊藤は「する」「観る」「視る」「読む」「支える」「話す」という6つのカテゴリーを用いて大学一年生を対象としてスポーツに対する態度や価値意識とスポーツの6つの側面との関連について明らかにした。価値意識については6つのカテゴリーのスポーツに関する価値意識について「5.非常に価値を認める～1.ほとんど価値を認めない」の5段階で回答を求めた。しかし、小泉・伊藤の研究では1つの項目に対する回答だけで価値意識を測定しており、より詳細な検討が必要であると考ええる。また、第一章第四節で述べた価値及び価値意識の定義から見ると、小泉・伊藤の質問項目ではスポーツの客体の性能を指しているとは言えず、価値意識の測定方法については再考の余地が残る。

このように、「する」スポーツ以外に対する価値意識に関する先行研究は十分とはいえない。多様なスポーツ参加が注目を浴びている昨今において「する」「みる」「支える」スポーツに対する価値意識についての研究を蓄積し、検討していく必要があるだろう。さらに、先行研究では「運動・スポーツは・・・である」といった質問文で参加形態に関わらない

スポーツ参与について尋ねる研究と、「運動・スポーツをすることは・・・である」という「する」スポーツのみに特化した価値意識研究が散見される。今後はスポーツ参与の多様化に合わせ、「する」「みる」「支える」といった参与形態別の価値意識について検討する必要がある。

第三章 研究目的

本研究は、以下の３点を目的とする。

- I. 支援態度が子どもの運動・スポーツ行動に与える影響及び、支援態度に価値意識が与える影響について明らかにする。
- II. 支援態度に影響を与える要因として、参与形態別価値意識と一般的価値意識を比較し、全体的なモデルの中でどちらの適合度が高いかについて明らかにする。

第四章 研究方法

第一節 研究の枠組み

本研究では支援態度に影響を与える要因の検討を行うために、予備調査と本調査の2つに分けて研究を行った。

1. 予備調査

本研究に使用する尺度を確認するための予備調査である。本研究の調査対象者のうち、東京都F市のW小学校1~4年生の保護者を対象に、価値意識測定尺度及び支援態度測定尺度の信頼性と妥当性を検討した。価値意識測定尺度については、従来の研究と同様に「一般的」価値意識及び「する」価値意識について尋ね、妥当性及び信頼性が確認されない場合には新たな尺度について検討を行う。

2. 本調査

予備調査で作成された尺度を用いて、東京都F市のJ小学校、R小学校1~4年生の保護者を対象に、支援態度に影響を与える要因について検討を行った。先行研究のモデルを参考に、支援態度にどのような要因が影響を与えるのか、どのような価値意識が支援態度に影響を与えているのか検討した。

第二節 調査方法

第一項 運動・スポーツ価値意識測定尺度の作成

尺度を作成するに当たり、青木(2003)¹⁶⁾のスポーツ観測定尺度を基に作成した。本研究では運動を実施していない母親も対象としていることから、運動部に所属していない高校生も対象にスポーツ観に関する研究を行った青木(2003)¹⁶⁾の作成した尺度を参考にした。青木のスポーツ観測定尺度を構成する「スポーツの価値性」「スポーツマンの卓越性」「スポーツの非低俗性」の3つの因子の中から、本研究では20項目から構成される「スポーツ価値性」因子を参考に尺度の作成を行った。尺度の作成に当たりまず、「母親の子どもに対するスポーツ価値意識」に適さない項目を削除した。項目の削除後、スポーツの価値、スポーツの意味や意義、子どものスポーツに対する親の期待に関する先行研究(中西,2012:水上,2000:奥田,1995)^{23),41),50)}を参考に質問項目の追加・修正を行った。

青木の作成したスポーツ観測定尺度では運動・スポーツを「する」ことに対する価値意識にしか焦点が当てられていなかった。そのため本研究においては運動・スポーツに対する多様な関わり方を踏まえ、運動・スポーツを「みる」「支える」ことに対する価値意識についても調査することとした。そこで、本研究では「みる」スポーツ、「支える」スポーツに対する価値意識についても尋ねるために、先行研究(中西,2012:谷ら,2003:中井,2005:松永ら,2006)^{35),39),41),49)}より質問項目の追加を行った。「支える」項目に関しては、大会やイベント、クラブの活動などをサポートする関わり方だけでなく、スポーツを教えることも「支える」スポーツとして取り入れた。これらの手順を踏まえ、本研究では表1に示すような8因子40項目からなる尺度を作成した。なお、質問文の中の「運動」、「スポーツ」という言葉を狭い意味での競技的なものに限定しないよう、質問文の下に「なお、ここでいう運動やスポーツは野球やサッカーといったものだけでなく、おにごっこやかけっこといった学校での体育を除いた広い意味での身体活動や、身体を動かす遊びのことを言います」という注意書きを追記した。

表 1 スポーツ価値意識の因子構造

因子名	質問項目
目的的价值	
教育的価値	
健康的価値	運動・スポーツは…である
社会性価値	運動・スポーツをすることは…である
社会・生活向上価値	
鑑賞的価値	運動・スポーツを見ることは…である
教える価値	運動スポーツを教えることは…である
サポート価値	大会やクラブのお手伝いをすることは…である

第二項 運動・スポーツ支援態度測定尺度の作成

親の支援態度を調査する尺度は、2 種類に分類される。1 つは子ども自身が認知する親からのサポートを測定するための子どもに親の支援態度を尋ねる尺度であり、もう 1 つは親が認知する親自身のサポートを測定するために親自身に支援態度を尋ねる尺度である。しかし、これらの尺度について Heitzler ら(2006)⁶⁾の「子どもが認知するサポートも親が自分で報告するサポートも同程度に子どもの身体活動に関連している」という報告や、近藤ら(2003)²⁹⁾の、「親の認知する子供の身体活動に対するサポートと子どもが認知する身体活動に対する親からのサポートとの間には有意な相関関係が認められ、親子の認知が一致していることが認められた」という報告から、両者の間に大きな違いは見られないと言える。本研究においては、対象を小学校 1 年生～4 年生と低学年が中心であるため子ども自身に尋ねるのが困難であると判断し、親が認知する支援態度を尋ねることとした。

まず、本研究の尺度を作成するにあたり親の支援態度に関する先行研究のレビューを行った Stewart ら(2011)¹⁴⁾の調査結果を参考に「parental support」に関する先行研究を検索した。Stewart らは 71 本のレビューの中から、本研究で対象とする小学校 1 年生～4 年生と最も近い「Children」の男女両方を対象とした 9 本の研究及び、それらの論文が引用されている 2011 年以降の文献を検索した。

その中から、本研究においては Davison(2011)⁵⁾によって作成された ACTS-MG(The Activity Support Scale for Multiple Groups)尺度が内容及び親が回答するのに使用される尺度として妥当であると判断し、採用した。ACTS-MG は、子どもの身体活動を支援する保護者の態度を測定するために保護者を対象とした調査で多く使われている ACTS を様々な人種にも適用できるように改良した尺度である。ACT で対象とされた non-Hispanic white populations 以外にも当てはまるよう改良された尺度であり、小学生の子どもを持つ親 27 人に対して内容や設問の妥当性についてコメントを求め改良を行い、信頼性と妥当性について検討したものである。この尺度は「Logistic support」、「Model」「Use of community resource」「Restricting access to sedentary activities」の 4 つの因子から構成されている。ACTS-MG を日本語に適応するように修正を行うため、英語が堪能なネイティブの大学生 2 名と共に慎重に和訳を行い、スポーツマネジメントを専攻する教員 2 名、大学院生 6 名と検討を行い意味がわかりにくい点があるかどうか確認を行い、問題がある部分については修正を行った。「あなたのお子様が活発に体を動かすように促す行動についてあなた自身がどのようにお考えですか」と尋ね、それぞれの質問に対して「1.全く反対～4.大いに賛成」の 4 段階で回答を求めた。なお、価値意識測定尺度と同様、質問文の中の「運動」、「スポーツ」という言葉を狭い意味での競技的なものに限定しないよう、質問文の下に「なお、ここでいう運動やスポーツは野球やサッカーといったものだけでなく、おにごっこやかけっこといった学校での体育を除いた広い意味での身体活動や、身体を動かす遊びのことを言います」という注意書きを追記した。

表 2 ACT-MG 尺度(Davison,2011)の因子構造

因子
Logistic support
Modeling
Use of community resources
Restricting access to sedentary activities

第三項 運動・スポーツ行動の測定

母親の支援態度が先行研究と同様に子どもの運動・スポーツ行動に影響を与えているかを検討するために、子どもの運動・スポーツ行動を測定した。本研究では、広い意味での運動・スポーツ行動を測定するため身体活動量の測定に関する先行研究を参考にした。子どもの身体活動量の測定に関しては、質問紙調査による自己評価法や歩数計・加速度計などの測定器具を使用して客観的に測定する方法などが挙げられる。運動・スポーツ行動の測定方法に関する研究は確認できなかったが、身体活動の測定方法に関する研究は散見される。その中でも、子どもの身体活動量の評価方法に関するレビュー研究を行った

Stewart(2007)¹³⁾の「自己評価測定法(Self-Report Measures)は子どもに使用するのとは適切でない」という指摘や、Baranowski(1984)¹⁴⁾の「10 歳以下の子どもが自分の活動を正しく回答することができない」という指摘を参考にし、本研究では小学校低学年を対象とするため親の評価により子どもの運動・スポーツ行動を測定することとした。また、本研究では予備調査、本調査を合わせて 1000 名程度の保護者を対象とする定量的な調査を行ったため、測定器具を用いて子どもの身体活動量を測定するのは困難であると判断した。そのため本研究では質問紙調査を実施し、子どもの運動・スポーツ行動を測定することにした。

質問紙調査による子どもの身体活動量の測定方法に関しては、子どもの体力について日本で最も大規模に行われている調査であり、文部科学省が毎年実施している「全国体力・運動能力等調査」^{56),58)}が本研究の運動・スポーツの定義に近いと判断し、これらの質問項目を参考に作成した。

また、運動スポーツ行動以外にも(文部科学省,2009;Stewart,2003;Cheryl ら,2010;Davis on,2011)を参考に、質問項目を設定した。

第五章 予備調査

第一節 調査概要

予備調査は、東京都 F 市にある W 小学校の 1～4 年生の保護者 437 名を対象に質問紙調査を実施した。回収数は 134、有効回答数は 134 であった。調査は 2013 年 7 月 19 日から 9 月 10 日の間に行われた。配布方法は各学級の担任の教員から生徒を通して各家庭に質問紙を配布し、生徒を通して担任の先生が回収を行った。基本的属性を除く全ての質問項目に不備がなく、かつ母親が回答したものを有効回答として扱った。

第二節 調査項目

調査項目に関しては子どもの年齢、性別などの基本的属性に加え、第四章第二節で作成した価値意識測定尺度及び支援態度測定尺度を使用した。質問項目の詳細については巻末資料に掲載した。

第三節 分析方法

予備調査では確認的因子分析を用いて本研究に使用する価値意識測定尺度及び支援態度測定尺度の項目の精選、及び信頼性と妥当性を検討した。項目の精選は確認的因子分析による因子負荷量及び I-T 相関分析、相関分析、天井効果を基に行った。妥当性は因子間の相関係数と AVE を用いて弁別的妥当性と収束的妥当性の検討を用い、信頼性は α 係数を基に各因子の内部一貫性の検討を行った。確認的因子分析によるモデル適合度の指標は GFI、AGFI、CFI はそれぞれ 0.90 以上、RMSEA は田部井(2001)³⁶⁾の「.05 から.08 の場合には穏当な適合度、.80 から.10 の場合にはやや劣る適合度である」という指摘を基に、モデルのあてはまりについて検討をした。

第四節 結果

第一項 基本的属性

予備調査の結果、基本的属性を表 3 に示した。回答した家庭の子どもの学年と性別は以下の通りである。学年に多少ばらつきが見られたが、性別は男女ほぼ同数の結果となった。

表 3 予備調査のサンプルの基本的属性

	N	%
学年		
1 年生	23	22.5
2 年生	44	43.1
3 年生	21	20.6
4 年生	14	13.7
性別		
男子	52	51
女子	50	49

第二項 運動・スポーツ価値意識測定尺度の検討

本研究で使用する価値意識尺度は先行研究を基に筆者が作成したものであったため、尺度の妥当性、信頼性を検討する必要がある。

まず、本研究の因子モデルの適合度を見るために 8 因子 40 項目で確認的因子分析を行ったところ、適合度指標は $GFI=.530$, $CFI=.719$, $AGFI=.461$, $RMSEA=.124$ となり、モデルを採択する基準には満たすことはできなかった。そこで、I-T 相関分析($r=.20$ 基準)、項目を削除した際にクロンバック α 係数が向上するもの、天井効果(平均値 4.5 以上基準)の 3 つの結果を基に因子から除外する項目を検討した。その結果、平均値が 4.5 を超えるものが 3 項目見られたため、天井効果により項目を削除した。

項目削除の結果、生活社会向上因子は 1 項目しか残らなかったため、因子として成立しないと判断し、因子の削除を行った。健康因子も項目の精選を行った結果 2 項目しか残ら

なかったが、親が子どもに運動・スポーツをする際に健康的価値は本研究においては重要な因子であると判断し、「運動・スポーツをすることはストレスの発散になる」という項目を残し、健康因子は削除せずに分析を行った。項目の精選後、モデル適合度が向上するように因子負荷量の低い項目から削除し、最終的に因子負荷量.70を基準に18項目を削除し、7因子22項目のモデルが示された。このモデルを用いて再度確認的因子分析を行ったところ、モデル適合度指標は $GFI=.756$, $CFI=.902$, $AGFI=.671$, $RMSEA=.098$ となった。前述したモデル適合度の基準を基に検討したところ、 GFI , $AGFI$ は基準に満たなかったものの、おおむねモデルを採択する基準を満たす適合度であった。

予備調査で得られたデータを基に価値意識測定尺度の信頼性と妥当性を検討するために、スポーツ参加動機尺度の妥当性と信頼性の検討を行った霜島・木村(2013)³⁰⁾を参考に確認的因子分析を行い、分析を行った。

まず、本尺度を構成する因子の信頼性を検討するために、各因子のクロンバック α 係数によって内部一貫性を検討した。その結果、表3に示す通り「健康的価値」因子を除き全て.80以上の値を示しており、各因子の内部一貫性はおおむね確保されていることが示された。

次に、収束的妥当性と弁別的妥当性を検討するために、因子負荷量(Factor Loading)、AVE(Average Variance Extracted)、因子間相関係数を用いて分析した。各因子の因子負荷量、AVEは表4、各因子の因子間相関係数は表5に示すとおりである。まず、各変数 AVE を.50以上を基準に収束的妥当性の検討を行った。その結果、全ての因子において基準を上回り、構成概念の収束的妥当性が確保されていることが示された。また、弁別的妥当性の検討を行うため、霜島・木村(2013)³⁰⁾の手順と同様に因子間の相関係数の2乗と各因子間の AVE を比較した。その結果、全ての変数において AVE が因子間相関係数の2乗より低い値を示したため、全ての因子で弁別的妥当性は確認することができなかった。

表 4 価値意識尺度の因子項目の信頼性と妥当性

	項目	α	FL	Ave.
目的	運動・スポーツをすることは人間としての根源的な欲求を充たすものである		.74	
	運動・スポーツをすることは爽快感を与える	.85	.88	.66
	運動・スポーツをすることは充実感を与える		.85	
	運動・スポーツは人間らしく生きるのに必要な活動である		.78	
教育的	運動・スポーツは健全な育成に良い影響を与える		.93	
	運動・スポーツは豊かな人間性の醸成に良い影響を与える	.90	.92	.76
	運動・スポーツは心身の健全な発達に寄与する		.76	
健康的	運動・スポーツは健康の保持増進に良い影響を与える		.73	
	運動・スポーツは体力の保持増進に良い影響を与える	.73	.84	.52
	運動・スポーツはストレスの発散になる		.57	
社会的	運動・スポーツは社会性を養う		.86	
	運動・スポーツをすることで年代の異なる人と交流できる	.85	.76	.66
	運動・スポーツはコミュニケーション能力を育てる		.81	
サポート	チームやクラブの運営をサポートすることは社会貢献を経験させる		.89	
	大会やイベントの運営をサポートすることは社会貢献を経験させる	.87	.79	.69
	チームやクラブの運営をサポートすることは様々な人と交流できる		.81	
教える	他の年代の子に運動・スポーツを教えることは子ども同士が協力し合う場面を生み出す		.84	
	他の年代の子に運動・スポーツを教えることは社会性を育てる	.87	.84	.69
	他の年代の子に運動・スポーツを教えることは思いやりの心を育てる		.81	
みる	運動・スポーツをみることはスポーツへの関心を高める		.77	
	運動・スポーツをみることは夢を与える	.84	.77	.63
	運動・スポーツをみることは感動を与える		.84	

表 5 価値意識尺度因子間相関

	目的	教育	健康	社交性	みる	教える	サポート
目的	1						
教育	.71	1					
健康	.76	.90	1				
社交性	.83	.88	.86	1			
みる	.89	.79	.86	.9	1		
教える	.75	.85	.79	.99	.93	1	
サポート	.64	.73	.72	.89	.72	.90	1

第三項 運動・スポーツ支援態度測定尺度の検討

本研究で使用する支援態度は、Davison(2011)⁵⁾が作成した ACT-MG を日本語に訳したものであったため、信頼性及び妥当性を検証する必要があった。先行研究で採択されたモデルを基に確認的因子分析を行い、信頼性及び妥当性を検討するために価値意識尺度と同様の手順で、項目の精選、信頼性及び妥当性の検討を行った。

まず、先行研究では因子分析実施後に 4 因子 12 項目となったとされていたため、本研究でも同様に 4 因子 12 項目で確認的因子分析を実施したところ、モデル適合度は CFI=.827, GFI=.831, AGFI=.725, RMSEA=.122 となり、モデルを採択する基準には満たなかった。そこで、本研究では因子構造のみ先行研究と同様にし、改めて確認的因子分析を実施し、I-T 相関分析($r=.20$ 基準)、項目を削除した際にクロンバック α 係数が向上する項目、天井効果(平均値 3.5 以上基準)の 3 つの結果を基に因子から除外する項目を検討した。その結果、I-T 相関分析、項目を削除した際にクロンバック α 係数が向上する項目、天井効果の 3 つを基準に削除する項目は見られなかった。次に、因子負荷量を基準として因子負荷量の低い項目から削除した。その結果、因子負荷量.50 を基準として 10 項目を削除した。項目の削除後、再度確認的因子分析を行った結果、モデルの適合度は CFI=.861, GFI=.837, AGFI=.767, RMSEA=.098 となり、おおむねモデルを採択できる基準となったため、本研究では 4 因子 15 項目を採択した。

本尺度を構成する因子の信頼性を検討するために、各因子のクロンバック α 係数によって内部一貫性を検討した。その結果、「Logistic support」、「Use of community resources」因子では α 係数が .70 を下回る結果となり、「Restricting access to sedentary activities」、「Modeling」は .70 を上回る結果となった。支援態度測定尺度の信頼性は課題が残る結果となった。

次に、弁別的妥当性及び収束的妥当性の検討を行った。収束的妥当性と弁別的妥当性を検討するために、因子負荷量、AVE、因子間相関係数を用いて分析した。各項目の因子負荷量、各因子の α 係数、AVE、因子間相関係数は表 5,6 に示すとおりである。まず、収束的弁別性を検討するために各変数 AVE を .50 以上を基準に妥当性の検討を行った。その結果、「Modeling」を除く全ての因子において基準を上回り、一定の構成概念の収束的妥当性が確保されていることが示された。また、弁別的妥当性の検討を行うため、霜島・木村(2013)の手順と同様に因子間の相関係数の 2 乗と各因子間の AVE を比較した。結果、「Logistic support」とでは AVE は因子間相関係数の 2 乗より低い値を示したため、弁別的妥当性が確認されなかった。しかし、それ以外の因子では AVE は因子間相関係数の 2 乗より高い値を示したため、一定の弁別的妥当性が確保されたと判断した。

表 6 支援態度尺度の因子項目の信頼性と妥当性

因子	項目	α	FL	Ave.
Logistic support	子どもの運動を見る		.63	
	身体を動かせる場所に連れて行く	.54	.48	.29
	スポーツチームに入れる		.49	
Modeling	自分自身がスポーツを楽しむ		.79	
	自分が定期的に運動する		.74	
	お手本になり、運動を奨励する	.78	.65	.42
	子どもと一緒に運動する		.46	
	ピクニックや遠出をする		.56	
Use of community resources	学校以外で体を動かせるところを探す		.56	
	自転車や徒歩の奨励	.63	.52	.36
	近所の公園や学校の使用を奨励		.71	
	TV や DVD の視聴制限		.88	
Restricting access to sedentary activities	パソコンの使用時間を制限	.86	.63	.63
	ゲーム時間の制限		.89	
	携帯の使用制限		.74	

表 7 支援態度尺度の因子相関行列

	Logistic support	Modeling	Use of community resources	Restricting access to sedentary activities
Logistic support	1			
Modeling	.89	1		
Use of community resources	.72	.60	1	
Restricting access to sedentary activities	.31	.35	.61	1

第五節 考察

価値意識測定尺度に関しては、予備調査の結果から、価値意識測定尺度の弁別的妥当性を確認することができなかった弁別的妥当性を確認できなかった。その原因として、因子間の相関係数が高いものが多かったことが挙げられる。因子間相関が高くなった理由として、「運動・スポーツは…である」というスポーツの一般的な価値と「運動・スポーツをする(みる・支える)ことは…である」というスポーツの参与形態別価値が混在してしまったことが挙げられる。スポーツの一般的な価値は価値意識が高いことが予想され、今回の尺度ではその高い相関係数に参与形態別の因子が引っ張られてしまったことが原因と考える。また、本尺度の質問項目にはスポーツの良い側面しか記述されておらず、それが結果的に回答項目の平均値を高くしたことが考えられる。因子間相関が高かったことや弁別的妥当性が確保できなかったことから、尺度全体としての妥当性は示されたものの、このままの因子を用いて本研究を行うことが困難であると判断した。

そこで、価値意識測定尺度の再検討を行い、本調査を実施することとした。本調査では一般的価値意識と参与形態別価値意識の2種類に分類し、それぞれの平均値が支援態度にどのように影響を与えているのかについて検討することとした。母親になることで自身がスポーツを「する」だけでなく、子どものスポーツを見たり、子どもがスポーツをするのを支える場面が出てくるなど、母親になることでスポーツ参加が多様化することが考えられるため、一般的価値意識だけでなく、参与形態別価値意識について尋ねる必要があると判断した。

支援態度測定尺度も価値意識測定尺度と同様に、信頼性及び妥当性に課題が残る結果となった。しかし、回答の平均値や因子間相関等を見て判断した結果、内容的には問題がないと判断した。そこで、本調査では予備調査の結果で得られた4因子15項目を用いて調査を行い、得られた結果から再度尺度の信頼性及び妥当性を検討することとした。

第六節 運動・スポーツ価値意識測定尺度の再検討

予備調査で得られた結果から、運動・スポーツ価値意識測定尺度の再検討を行った。

一般的価値意識測定尺度は、予備調査で使用した項目の中の「運動・スポーツは…」と聞いた項目 20 項目を使用して一般的価値意識測定尺度を作成した。質問項目の詳細については巻末資料に掲載した。

参与形態別価値意識測定尺度は、一般的価値で使った 20 項目を「運動・スポーツをすることは…」に変換し、する価値とした。加えて、予備調査による項目削除後に残った「運動・スポーツをすることは…」と聞いた項目 4 項目を追加し、計 24 項目で「する」価値尺度を作成した。「みる」「支える」項目については、予備調査によりそれぞれ残った 3 項目を使用した。また、「する・みる・支える」それぞれ共通の項目を追加するため、予備調査の結果より、「目的的価値」、「教育的価値」、「健康的価値」、「社交的価値」の 4 つの因子の中からそれぞれ因子負荷量が最も高い項目及び「する・みる・支える」関わり方をする際に意味が通じるものを選定し、尺度を作成した。また、参与形態に関わらないスポーツの価値として「楽しさ」の要素を加えるために、「運動・スポーツは楽しみを生み出す」項目を追加することとした。「楽しさを生み出す」、「爽快感を与える」、「健全な育成に良い影響を与える」、「ストレスの発散になる」、「コミュニケーション能力を育てる」の 5 項目を共通の項目とし、合計 40 項目を参与形態別価値意識測定尺度として本調査を行うこととした。質問項目の詳細に貸しては巻末資料に掲載した。

回答には予備調査にて 5 段階リッカート尺度では差が出にくかったことから、本調査では調査Ⅰ・Ⅱ共にそれぞれの質問項目に対して「1 全くそう思わない～7. 全くそう思う」の 7 段階リッカート尺度を用いた。

第六章 本調査

第一節 調査概要

東京都 F 市にある R 小学校および J 小学校の 1~4 年生の保護者を対象に質問紙調査を実施した。R 小学校 532 名、J 小学校 303 名の保護者に配布した。そのうち有効回答は R 小学校 238 名、J 小学校 204 名であった。

調査は 2013 年 11 月 19 日から 12 月 10 日の間に実施した。質問紙は各学級の担任の先生から生徒を通して各家庭に質問紙を配布し、生徒を通して担任の先生が回収を行った。加えて、配布から一週間後に担任の教員を通してアンケートを提出するように催促するプリントを配布してもらい、再度一週間の回収期間を設けた。回答を得られたもののうち、基本的属性を除く質問項目を不備なく回答しているものかつ母親が回答したものを有効回答として扱った。

第二節 調査項目

R 小学校・J 小学校共に予備調査にて作成した支援態度測定尺度に加え、先行研究(文部科学省,2009;Stewart,2003;Cheryl ら,2010;Davison,2011)^{3),5),12),55}を参考に「親の中学・高校での運動部活動経験の有無(以降、母親の運動部活動経験)」、「現在の親の運動実施頻度(以降、母親の運動実施頻度)」、「親自身がどの程度運動を楽しんでいるか(以下、楽しみ)」、「子どもが運動することを親がどの程度重要だと考えているか(以下、重要性)」、「子どもの平日の運動実施時間(体育の授業時間を除く)」、「子どもの休日の運動実施時間」といった質問項目を設定した。

これらの質問項目に加え参与形態別価値意識と一般的価値意識を比較するために、R 小学校には参与形態別価値意識、J 小学校に一般的価値意識について尋ね、それ以外の設問は全て一緒のものとした。質問項目の詳細に関しては、巻末資料に掲載した。

第三節 分析方法

まず、支援態度測定尺度の因子構造の再検討を行うために、本調査で使用した項目を用いて探索的因子分析を行った。支援態度測定尺度は両小学校に尋ねていたため、分析には R 小学校、J 小学校の両校の有効回答 442 名を用いて分析を行った。

次に、調査 I では R 小学校で得られたデータを用いて一般的価値意識について、調査 II では J 小学校から得られたデータを用いて参与形態別価値意識についてモデルを作成し、それぞれ共分散構造分析を行った。本研究では共分散構造分析を行うにあたり、支援態度及び一般的価値意識、参与形態別価値意識の因子の下位尺度得点を算出して研究を行った。モデルの作成に当たっては、「一般的価値意識」「参与形態別価値意識」「重要性」「楽しみ」「母親の運動実施頻度」「母親の運動部活動経験」は全て母親の運動・スポーツに対する意識や行動であったため、5 つの間には相関関係があると仮定し、5 つそれぞれの変数の間に共分散を設定した。

共分散構造分析の結果得られたモデルから、支援態度に影響を与える要因を一般的価値意識及び参与形態別価値意識を用いて検討し、両者を比較した。比較し、考察するに当たっては R 小学校と J 小学校の回答に差がないかどうか確認するために t 検定を行った。

また、得られたモデルの結果から、先行研究と同様に支援態度が子どもの運動・スポーツ行動に影響を与えているのか、検討を行った。さらに、価値意識及び支援態度と母親の運動部活動経験の関係について検討を行った。

なお、共分散構造分析によるモデル適合度の指標は GFI、AGFI、CFI はそれぞれ 0.90 以上、RMSEA は 0.80 以下を基準とした。

第四節 結果

第一項 基本的属性

本調査の結果、基本的属性を R 小学校は表 8、J 小学校は表 9 に示した。J 小学校、R 小学校共に子どもの学年、性別に大きな偏りは見られなかった。J 小学校と R 小学校でサンプルの属性に大きな差は見られなかった。両校共に基本的属性にいくつか欠損値が見られたが、その他の回答に不備は見られなかったため、問題はないと判断して研究を行った。両校で得られたデータを用いて共分散構造分析を行い、考察するにあたり、両校の基本的属性に大きな差がなかったことから、両校に大きな差がないと判断し、比較を行った。

表 8 R 小学校 サンプルの基本的属性(n=238)

	N	%
学年		
1 年生	71	29.8
2 年生	46	19.3
3 年生	65	27.3
4 年生	54	22.7
欠損値	2	0.8
性別		
男子	109	45.8
女子	127	53.4
欠損値	2	0.8
部活動経験		
あり	179	75.2
なし	59	24.8

表 9 J 小学校 サンプルの基本的属性(n=204)

	N	%
学年		
1 年生	57	27.9
2 年生	57	27.9
3 年生	48	23.5
4 年生	42	20.6
性別		
男子	109	53.4
女子	94	46.1
欠損値	1	0.5
部活動経験		
あり	157	77
なし	47	23

第二項 運動・スポーツ支援態度測定尺度の再検討

予備調査の結果から、運動・スポーツ支援態度測定尺度の信頼性及び妥当性の確認できなかったため、本調査実施後に再度信頼性及び妥当性について検討を行った。予備調査と同様、信頼性はクロンバック α 係数を基に内的一貫性を検討し、妥当性は AVE、因子負荷量、因子間相関を用いて収束的妥当性と弁別的妥当性について検討をした。各項目の因子負荷量、各因子の α 係数、AVE、因子間相関係数は表 10、表 11 に示す通りである。

予備調査と同様、 α 係数は「Logistic Support」因子および「use of community resources」因子では基準である.70 を満たすことが出来ず、信頼性を確認することはできなかった。また、収束的妥当性については、AVE が基準である.50 を超えたのは「Restricting access to sedentary activities」因子のみであり、他の因子では収束的妥当性を確認することができなかった。また、弁別的妥当性に関しては「Logistic Support」因子を除き AVE が各因子の相関係数の 2 乗を超えたため、一定の弁別的妥当性を確認することができた。

本調査の結果を使用して分析を行っても信頼性および妥当性が確認することができなかったため、因子構造を再度確認する必要があると判断した。そこで、本調査で使用した 15 項目で探索的因子分析(最尤法・Promax 回転)を行うこととした。

表 10 支援態度尺度の因子項目と信頼性と妥当性の再検討

因子	項目	α	FL	Ave.
Logistic support	子どもの運動を見る		0.61	
	身体を動かせる場所に連れて行く	0.54	0.49	0.29
	スポーツチームに入れる		0.50	
Modeling	自分自身がスポーツを楽しむ		0.78	
	自分が定期的に運動する		0.83	
	お手本になり、運動を奨励する	0.81	0.72	0.48
	子どもと一緒に運動する		0.64	
	ピクニックや遠出をする		0.40	
Use of community resources	学校以外で体を動かせるところを探す		0.64	
	自転車や徒歩の奨励	0.65	0.58	0.39
	近所の公園や学校の使用を奨励		0.66	
Restricting access to sedentary activities	TV や DVD の視聴制限		0.77	
	パソコンの使用時間を制限	0.85	0.67	0.60
	ゲーム時間の制限		0.89	
	携帯の使用制限		0.75	

表 11 支援態度尺度の因子相関行列

	Logistic support	Modeling	Use of community resources	Restricting access to sedentary activities
Logistic support	1.00			
Modeling	.70	1.00		
Use of community resources	.89	.61	1.00	
Restricting access to sedentary activities	.47	.27	.58	1.00

本調査で得られたデータを基に最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を行った結果を表 12 に示した。初期の固有値が 1.00 であること、各因子を構成する各項目の因子負荷量が.40 以上になること、解釈可能な因子を構成することを条件として分析を行ったところ、表 12 に掲載した 3 つの因子が抽出された。3 つの因子をそれぞれ、第一因子は座位中心の生活を制限する「座位中心生活の制限」因子、第二因子は親自身が子どものロールモデルとなり運動を奨励する「ロールモデル」因子、第三因子は子どもの運動・スポーツを促進するための情報を子どもに与えたり、機会を与えるなどして促す行動である「奨励」因子と命名した。

次に、探索的因子分析の結果得られた支援態度測定尺度の信頼性及び妥当性の検討を行った。予備調査と同様、霜島・木村(2013)³⁰⁾の手順を参考に信頼性及び妥当性の検討を行った。各因子の AVE, α 係数、各項目の因子負荷量、各因子の因子間相関係数は表 12、表 13 に示す通りである。まず、各因子のクロンバック α 係数を基に内部一貫性を確認し、信頼性を検討した。その結果、全ての因子で.70 を上回る結果となり、因子の信頼性が確保されていることが示された。

また、各因子の AVE は「奨励」因子を除き.50 を上回る結果となったため、おおむね支援態度測定尺度の収束的妥当性が確保されているものとして研究を行った。弁別的妥当性に関しては全ての因子で AVE は因子間相関係数の 2 乗よりも高い値を示したため、弁別的妥当性は確認された。

以上の結果から、本調査では 3 因子 12 項目の支援態度測定尺度を用いて共分散構造分析を実施することとした。

表 12 支援態度測定尺度 探索的因子分析結果

	1	2	3
ゲーム時間の制限	0.917	-0.051	0.021
TV や DVD の視聴制限	0.786	0.049	-0.005
携帯の使用制限	0.712	-0.032	0.049
パソコンの使用時間を制限	0.694	0.023	-0.055
自分が定期的に運動する	0.092	0.956	-0.21
お手本になり、運動を奨励する	-0.084	0.696	0.082
自分自身がスポーツを楽しむ	-0.047	0.678	0.161
子どもと一緒に運動する	0.025	0.517	0.136
スポーツチームに入れる	-0.027	0.282	0.226
身体を動かせる場所に連れて行く	-0.069	-0.03	0.638
近所の公園や学校の使用を奨励	0.089	-0.04	0.627
学校以外で体を動かせるところを探す	-0.009	0.067	0.581
自転車や徒歩の奨励	0.096	0.032	0.531
ピクニックや遠出をする	-0.088	0.184	0.363
子どもの運動を見る	0.137	0.185	0.339
因子抽出法: 最尤法			
回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法			

表 13 支援態度測定尺度の因子相関行列

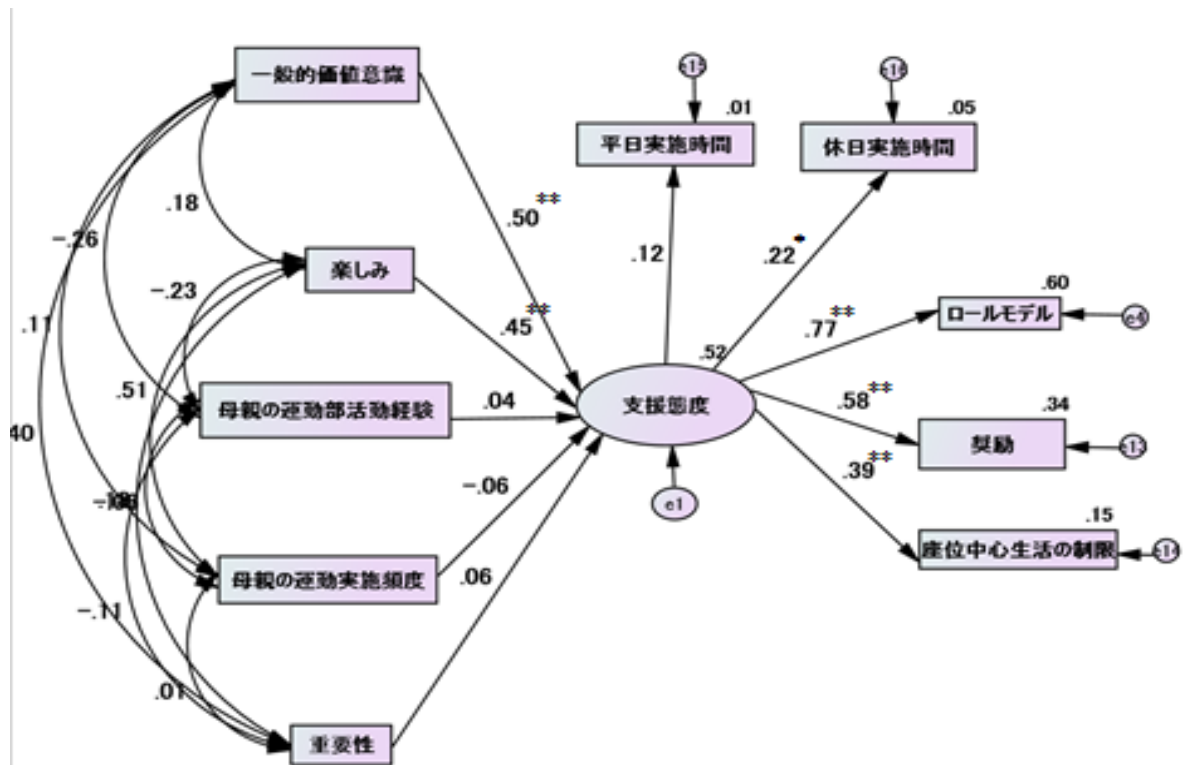
	座位生活の制限	ロールモデル	奨励
座位生活の制限	1		
ロールモデル	.220	1	
奨励	.411	.489	1

表 14 支援態度尺度の信頼性と妥当性の検討

		α	FL	AVE
座位生活の制限	ゲーム時間の制限		0.92	
	TV や DVD の視聴制限	0.86	0.79	0.61
	携帯の使用制限		0.71	
	パソコンの使用時間を制限		0.69	
ロールモデル	自分が定期的に運動する		0.96	
	お手本になり、運動を奨励する	0.82	0.70	0.53
	自分自身がスポーツを楽しむ		0.68	
	子どもと一緒に運動する		0.52	
奨励	身体を動かせる場所に連れて行く		0.64	
	近所の公園や学校の使用を奨励	0.70	0.63	0.35
	学校以外で体を動かせるところを探す		0.58	
	自転車や徒歩の奨励		0.53	

第四項 調查 I：一般的價值意識

調査 I では、一般的価値意識について尋ねた R 小学校の有効回答 238 名のデータを用いて一般的価値意識、母親の運動部活動経験の有無、母親の運動実施頻度、楽しみ、重要性が母親の支援態度に与える影響について、先行研究のモデルを参考に図 5 のようなモデルを作成し、共分散構造分析によって検討した。その結果、モデルの適合度は CFI=.792, GFI=.916, AGFI=.816, RMSEA=.119 となり、基準を満たす値を得ることは出来なかった。一般的価値意識を用いた支援態度に影響を与える要因のモデルは十分な適合度を得られないことが明らかになった。



*p<.05**P<.01

図5 一般的価値意識を用いた支援態度の影響要因に関する共分散構造分析結果

第五項 調査Ⅱ：参与形態別価値意識

調査Ⅱでは、参与形態別価値意識について尋ねた R 小学校の有効回答 204 名のデータを用いて分析を行った。

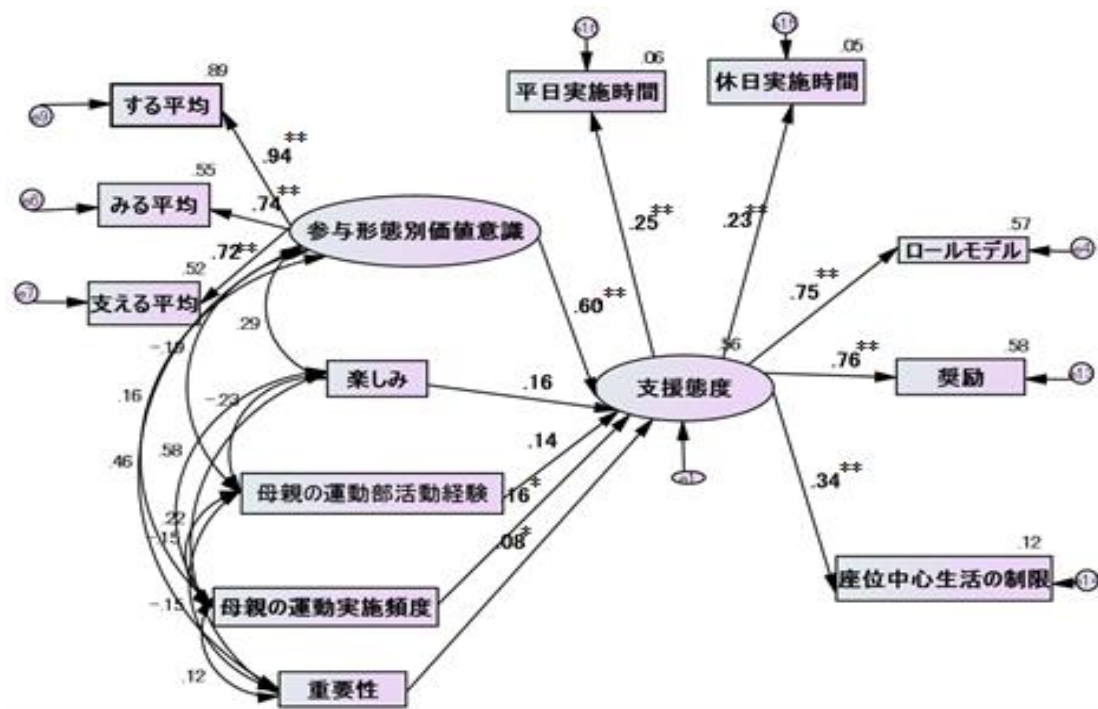
「参与形態別価値意識」、「母親の運動部活動経験」、「母親の運動実施頻度」、「楽しみ」、「重要性」が母親の支援態度に与える影響について検討するために、先行研究のモデル(図 1、図 2、図 3)を参考に図 6 のようなモデルを作成し、共分散構造分析を行った。その結果、モデル適合度は CFI=.916,GFI=.923,AGFI=.861,RMSEA=.080 となり、一定の当てはまりのよさを確認することが出来た。

共分散構造分析の結果から、「参与形態別価値意識」、「母親の運動実施頻度」、「母親の運動部活動経験」それぞれから支援態度に対するパスに統計的有意性が確認された。この 3 つの中で最もパス係数が高かったものは「参与形態別価値意識」から「支援態度」に対するパスであった。また、「母親の運動実施頻度」、「母親の運動部活動経験」から支援態度へのパスは有意ではあったが、パス係数は低い値となった。

参与形態価値意識を構成する「する」、「みる」、「支える」全ての因子から、参与形態別価値意識に対してのパスは有意であった。その中でも「する」因子のパス係数が高く、「支える」のパス係数が最も低い値となった。

先行研究(Stewart,2003;Davison,2011,Cheryl ら,2010;Janie,2013)^{3),5),7),12)}では、「楽しみ」、「重要性」が支援態度に影響を与えているとされてきたが、本研究では支援態度に対して有意なパスを確認することができなかった。

支援態度に影響を与える要因として、支援態度から「ロールモデル」、「座位生活の制限」、「奨励」因子へのパスは全て有意なパスであることが確認された。「ロールモデル」と「奨励」のパス係数は同程度であったが、「座位生活の制限」のパス係数は他の 2 つに比べ低い値となった。また、支援態度から子どもの運動実施時間(平日・休日)にも有意なパスであることが確認された。



*p<.05**P<.01

図 6 参与形態別価値意識を用いた支援態度の影響要因に関する共分散構造分析結果

第六項 考察

I. 母親の子どもの運動・スポーツ価値意識に関する考察

本研究では、一般的価値意識に比べて参与形態別価値意識の方が支援態度に影響を与える要因としてモデルの適合度がよく、本研究の結果から参与形態別価値意識を用いて支援態度を説明するモデルが作成された。この一般的価値意識と参与形態別価値意識のモデル適合度の差は、表 14 に示した結果から、R 小学校と J 小学校の回答の差異から生じる差ではないと言える。これらのことから、一般的価値意識に比べ参与形態別価値意識の方が支援態度に対して強い影響を与えていることが明らかになった。また、予備調査の結果より、従来のような「一般的価値意識」や、「する」スポーツにのみ特化した価値意識の研究では不十分であることが指摘できる。

これらの結果は、「母親の子どもに対するスポーツ価値意識」だけに留まらず、「スポーツ価値意識」について、これまでの価値意識研究で使用されてきた「運動・スポーツは…」と尋ねる一般的価値意識や、「する」スポーツのみに着目する価値意識研究のあり方の再検討が必要であることを示唆している。スポーツに対して多様な関わり方が指摘される現在において、価値意識の問い方にも多様な質問が求められていると考えられる。「する」スポーツがスポーツ参与の中心とされていた頃には「運動・スポーツは…」と尋ねられた場合に、ほとんどの人が「運動・スポーツをすることは…」という暗黙の理解をしていた。しかしスポーツ参与が多様化している現在では、暗黙の理解の範囲が広がっており「運動・スポーツは…」という質問項目ではそれぞれが思い浮かべるスポーツ参与が異なるため、価値意識を正確に測定できないことを示唆された。これまでの価値意識研究のような「する」スポーツにのみ着目したり、暗黙のうちに「する」スポーツを想起させるような価値意識研究では十分ではないということが示唆された。

近年では、社会的にも様々なスポーツ参与が求められている。例えば、2020 年に東京でオリンピックが開かれることが決定し、それに対し読売新聞(2013 年 12 月 17 日朝刊)⁶²⁾に

よると、「政府は 2014 年度から、20 年開催の東京五輪・パラリンピックを支えるボランティアの育成に乗り出す。」と紹介されており、政府も東京オリンピック・パラリンピックに向けてボランティアの育成の必要性について検討しており、「支える」スポーツへの需要が高まっている。また、東京オリンピックを盛り上げるためにも様々なオリンピック競技の観戦に対する享受能力を高める必要があり、「みる」スポーツへの需要も高まっている。このように「する」以外のスポーツとの関わりについての検討について社会的な必要性も拡大しており、今後は「する」、「一般的価値」だけでなく、「みる」、「支える」といった多様な関わり方に対する価値意識にも着目した研究も求められるだろう。

また、母親の子どものスポーツに対する価値意識について、本研究では「する」スポーツだけでなく、「みる」スポーツ、「支える」スポーツに対する価値意識も同様に支援態度に影響を与えていた結果が得られた。このことから、母親に対して「する」以外のスポーツとの関わり方が存在することや、「みる」、「支える」といったスポーツの関わり方がもたらす価値についても情報を与える必要があると考えられる。また、情報を与えたり、子どもと一緒に運動をするなどのプログラムを実施することで母親の価値意識を変容させるといった研究も今後行う必要があるだろう。

II. 母親の子どもの運動・スポーツ支援態度に関する考察

これまで先行研究では支援態度に影響を与える要因として母親の運動実施頻度や基本的属性などに焦点が当てられてきたが、本研究では母親の支援態度に価値意識が影響を与えているという結果が得られた。子どもの体力を向上させるために母親の支援態度マネジメントする必要があると考えられるが、母親の運動実施頻度や基本的属性は変容することが困難なことから、支援態度のマネジメントについては十分に議論が行われてこなかった。しかし、本研究で支援態度に影響を与えることが明らかになった価値意識は変容することのできるものであることから、母親の価値意識を変容させることで、支援態度を変容させ

ることができることが示唆された。母親に子どもの「運動・スポーツ参与によって得られる価値」を伝えることで価値意識を変容させ、支援態度を変容させることができるのではないだろうか。また、母親の価値意識についても「運動・スポーツは…である」といった運動・スポーツにに対する一般的な価値についてではなく、子どもが多様なスポーツ参与によって得られるそれぞれの価値について、母親に説明し、価値を理解してもらう必要があるだろう。母親が多様なスポーツ参与に対する価値を理解することで積極的な支援を行い、子どもの体力が向上することができると考えられる。

また、支援態度に影響を与える要因として、「多様なスポーツ参与への価値意識」から問うことが重要であるということが明らかになった。これは、現代のスポーツ参与の多様化や、母親になることで自身がスポーツを「する」だけでなく、子どものスポーツを「みる」あるいは子どもがスポーツをすることを「支える」というようにスポーツ参与が多様化することが影響していると考えられる。

また、本研究では「楽しみ」、「重要性」は支援態度に影響を与えないという先行研究と異なる結果が得られたことについては、文化の違いが影響を与えていると考えられる。日本においては、子どもと親と一緒に運動・スポーツをしておらず、親は親、子どもは子どもで運動・スポーツを実施しているために母親自身の「楽しみ」、「重要性」が母親の支援態度に影響を与えているのではないかと考える。

Ⅲ.母親と子どもの運動・スポーツ行動に関する考察

支援態度に価値意識が影響を与えていることが明らかになったが、先行研究で支援態度に影響を与える要因としてこれまで検討されてきた「楽しみ」「重要性」は本研究では有意なパスを確認することが出来ず、影響を与えていないことが明らかになった。また、「母親の運動実施頻度」、「母親の運動部活動経験」から支援態度に対してのパスが有意であったが、パス係数の値は低いという結果が得られた。この2つの結果から、親子一緒に運動・

スポーツを実施していないという様子が推察される。これは文部科学省(2010)の「全国体力・運動能力等調査結果」が示した、小学校5年生の児童で家族と運動やスポーツをする頻度を「まったくしない」あるいは「年に数回」と回答したのは男子36%、女子40%であったという結果を支持するものであると言える。親は親、子どもは子どもといったように、運動・スポーツを別の環境で実施していることが示唆された。親もサポートと言え送迎や少年団の当番と言ったことが多く、子どもの運動・スポーツに対する支援と母親自身の運動実施は繋がりが薄いと言えるだろう。「楽しみ」、「重要性」といった親自身の運動・スポーツに対する態度や行動が、子どもへの支援態度に影響を与えていないことが明らかになったことから、親自身の運動・スポーツに対する行動や態度と子どもへの支援態度は繋がりが薄いといえるだろう。海外では子どもと親が一緒に運動・スポーツを実施していることから、「楽しみ」、「重要性」が支援態度に影響を与える要因として挙げられていたが、日本においては前述したように一緒に実施していないという背景が、このような結果に繋がったと推察される。これらの結果は、これまでの研究のように、子どもの運動・スポーツ行動や身体活動量に影響を与える要因として親の影響を検討し、それらをどのように改善して子どもの運動・スポーツ行動や身体活動量を増加させるのか、といった議論だけでは不十分であることを示しているだろう。親の影響によって子どもの運動・スポーツ行動や身体活動量を改善するため、親自身も一緒に運動・スポーツに取り組み、身体活動量を増加させるというアプローチも必要である。そのため、母親の支援態度と子どもの運動・スポーツ行動を切り離して考えるのではなく、同時に改善することで子どもの身体活動を改善していくことが重要であり、親子一緒に運動・スポーツを実施することで、親がモデルとなり、運動・スポーツを実施する場所に親が連れて行くなどの支援態度を行うようになるといえるだろう。

第七章 結論

第一節 まとめ

本研究の目的は、子どもの運動・スポーツへの母親の支援態度に与える影響を明らかにすることであった。目的を達成するために東京都 F 市の 3 つの小学校 1~4 年生の保護者の質問紙調査にて予備調査と本調査を実施し、分析を行った。その結果、以下の 3 点が明らかになった。

1. 支援態度から子どもの運動・スポーツ行動に対してのパスに統計的有意性が確認されたことから、先行研究と同様、子どもの運動・スポーツ行動に対して支援態度が影響を与えていることが明らかになった。

2. 支援態度に対して、価値意識が有意なパスを与えており、かつパス係数が最も高い項目であったことから、価値意識が支援態度に影響を与えていることが明らかになった。

3. 支援態度を説明する要因として、一般的価値意識と参与形態別価値意識を比較した場合、参与形態別価値意識の方がモデル適合度が高く、参与形態別価値意識の方が支援態度を説明する要因として適切であることが明らかにされた。また、この結果から従来の運動・スポーツ価値意識研究のような「する」価値や「一般的価値意識」に焦点を当てた研究だけでは不十分であることが示唆された。

今後は子どもの体力を向上させるために、母親が「子どもが運動・スポーツ参与によって得られる価値」について理解を得られるような働きかけを行うなどすることで、母親の支援態度をマネジメントしていく必要があるだろう。特に、「する」スポーツだけでなく、多様なスポーツ参与によって得られるそれぞれの価値について母親が理解することで母親が支援態度が変容し、家庭で運動・スポーツに取り組む機会を増やすことができるのではないかと考える。

第二節 研究の限界

本研究では、子どもの身体活動量の測定について質問紙調査によって親が認知する子どもの身体活動量について尋ねた。しかし、子どもの身体活動量の測定に関しては、歩数計や心拍数計といった測定器具を使用して客観的に測定を行う研究も多い。「大規模な量的研究を行う場合には測定器具を使用するのは困難である」という Stewart(2011)¹⁴⁾の指摘のとおり測定器具を使用するのは困難ではあるが、今後必要となってくるであろう。

また、本研究は F 市スポーツ推進委員会と F 市が協同で行っている「子ども体力チャレンジ事業」の一環として調査を実施した。本研究の調査を実施したのは事業 2 年目にあたる時期であり、事業の結果から運動・スポーツに対して好意的な態度を示す母親が調査対象に若干多く含まれてしまっている可能性も拭えない。

第三節 今後の課題

考察で指摘したように、本研究結果から子どもの運動・スポーツ行動から母親の支援態度が形成される可能性が示唆された。今後はこのような検討も必要であり、母親の支援態度について量的だけでなく、質的な研究や縦断的な研究によって支援態度の形成過程について研究を行う必要があるだろう。

また、支援態度に影響を与える要因として母親の年齢や職業などの基本的属性について質問項目を設定することができなかったため、今後検討し、さらに議論を行う必要があるだろう。

最後に、本研究では親の支援態度として母親に着目して研究を行ったが、Davison(2003)が「父親と母親では身体活動の奨励方法が異なる」⁴⁾と指摘した通り、今後は父親の支援態度や価値意識に着目して研究を行う必要がある。また、青木(2003)の「スポーツの価値性では男子が女子より高い結果が得られた」¹⁶⁾という報告から、母親よりも父親の方が価値意識が高いことが考えられるため、父親を対象として検討する必要があるだろう。

支援態度に影響を与える要因として、過去の運動部活動経験よりも価値意識の方が影響が大きかったという本研究の結果及びJリーグクラブのサッカースクール会員保護者の観戦行動について研究を行った手塚(2007)の「子どもを通してマリノスに関心を持つようになったという回答があわせて約45%と高い割合を占めたことにより、親や保護者の態度に、子どもと横浜F・マリノスの接点が大きく影響を与えることが本研究において明らかになった。」³⁸⁾という指摘から、母親の支援態度が子どもに影響を与えるだけでなく、子どもが運動・スポーツを始めることで母親の支援態度が形成される可能性があると考えられる。これについては、今後質的調査や縦断的調査などを行うことで検討していくべきであるだろう。

参考文献

1. Baranowski, Rosalind J. Dworkin, Chester J. Cieslik, Paul Hooksc, Donna R. Clearman, Laura Rayd, J. Kay Dunn & Philip R. Nader Baranowski(1984), Reliability and Validity of Self Report of Aerobic Activity: Family Health Project Research Quarterly for Exercise and Sport, Volume 55, Issue 4, 309-317
2. Brustad, R.J. (1996), Attraction to physical activity in urban school children: parental socialization and gender influences, Research Quarterly for Exercise and Sport (RQES), 67(3), 316 - 323.
3. Cheryl A. Zecevic, Line Tremblay, Tanya Lovsin, and Lariviere Michel (2003), Parental Influence on Young Children's Physical Activity, International Journal of Pediatrics Volume 2010, 9 pages
4. Davison KK, Cutting TM, Birch LL. (2003), Parent's Activity-Related Parenting Practices Predict Girl's Physical Activity, Med Sci Sports Exerc, 35(9), 1589-95.
5. Davison KK, Li K, Baskin ML, Cox T, Affuso O. (2011), Measuring parental support for children's physical activity in white and African American parents: the Activity Support Scale for Multiple Groups (ACTS-MG). Preventive Medicine Volume 52, Issue 1, January 2011, Pages 39-43
6. Heitzler CD, Martion SL, Duke J, Human M (2006), Correlates of physical activity in a national sample of children aged 9-13 years, Prev Med 2006, 42(4), 254-260
7. Janie M. Leary, Christa L, Lilly, Geri Dino, Pail D. Loprinzi, Lesley Cottrell (2013), "Parental Influences on 7-9 years olds' physical activity: A conceptual model", Preventive Medicine 56, 341-344
8. Kenyon & McPherson (1973), Becoming Involved in Physical Activity and Sport: A process of socialization., G.L. Rarick (Ed.), Physical activity: Human growth and development, Academic Press, New York, pp. 303-332
9. Lee (2000), The measurement of Values in Youth Sport: Development of the Youth Sport Values Questionnaire, Journal of Sport & Exercise Psychology, 22, 307-326
10. Levent İlhan, Eylem Gencer (2012), THE MEDIA AS THE FACTOR OF TENDING TO SPORT IN CHILDREN: A STUDY AFTER A TV COMPETITION PROGRAMME NAMED AS "ICE DANCING", Nigde University Journal of Physical Education And Sport Sciences Vol 6, No 1, 2012
11. Philip White, William McTeer (2012), Socioeconomic Status and Sport Participation at Different Developmental Stages During Childhood and Youth: Multivariate Analyses Using Canadian National Survey Data, Sociology of Sport Journal, 29, 186 -209

12. Stewart G Trost, PhD F sallies, PhD Russell R Pate, PhD, Wendell G Taylor, PhD, Marsha Dowda, DrPH(2003), Evaluating a Model of Parental Influence on Youth Physical Activity.
13. Stewart G. Trost, PhD (2007), Measurement of Physical Activity in Children and Adolescents, American Journal of Lifestyle Medicine, July/August 2007 vol. 1 no. 4 299-314
14. Stewart G Trost, PhD, Paul D. Loprinzi, MS(2011), Parental Influence on physical Activity Behavior in Children and Adolescents: A Brief Review, American Journal of Lifestyle Medicine, 2011 5:171, 171-180
15. Welk, Gregory J., Kherrin wood, Gina Morss(2003), Promoting physical activity in children : parental influences, Pediatric Exercise Science, 15, 19-33
16. 青木邦男(2003), 「高校運動部員のスポーツ観とそれに関連する要因」, 体育学研究, 48, 207-223
17. 阿部智, 木村真知子, 若吉浩二, 石川元美, 小畑治, 高橋豪仁(2008), 「Ballschule プログラムが児童の運動能力に与える影響」, 奈良教育大学紀要, 57, 169-179
18. 猪飼道夫(1973), 「運動生理学入門 第8版」, 杏林書院
19. 上杉正幸(1985), 「大学生のスポーツ価値意識について(4)-価値意識の類型化-」, 香川大学教育学部研究報告第I部, 64, 167-181
20. 上杉正幸(1986), 「大学生のスポーツ価値意識について(5)-数量化によるパターン分類-」, 香川大学教育学部研究報告, 第一部, 67, 21-35
21. 梅原大介, 森勇示(2006), 「『遊びチューター』による子どもの体力づくりについて-Y 小学校の実践-」, 愛知教育大学保健体育講座研究紀要, 31, 1-7
22. 岡田正章, 編野武博, 大戸 美也子, 小林 美実, 萩原元昭, 千羽喜代子, 上田礼子, 大場幸夫, 中村悦子(1997), 「現代保育用語辞典」, フルーベル館
23. 奥田援史(1995), 「幼児の運動プログラム参加に対する母親の発達期待」, スポーツ教育学研究, 14, 111-116
24. 小澤治夫, 小林秀紹(2007), 「小学生の体力と生活習慣・運動欲求の因果構造分析」, 東海大学紀要体育学部, 37, 69-73
25. 上地広昭, 竹中晃二, 鈴木英樹(2003), 「子どもにおける身体活動の行動変容段階と意思決定バランスの関係」, 教育心理学研究, 51, 288-297
26. 上地広昭, 竹中晃二, 鈴木英樹(2003), 「小学校高学年における身体活動の行動変容段階とセルフエフィカシーの関係」, 日健教誌, 1, 23-30
27. 木下勝統, 上地広昭, 丹信介, 森田俊介(2008), 「子どもの身体活動増強のための保護者からのサポートについて」研究論叢 第1部・第2部 人文科学・社会科学・自然科学 58, 139-148, 山口大学教育学部
28. 小泉昌幸, 伊藤巨志(2004), 「大学生のスポーツ行動の価値意識に関する一考察」, 新潟工

科大学研究紀要,第9号,107-112

29. 近藤麻知子,小室啓子,竹中晃二(2003),「子どもの身体活動における心理・社会的要因と親の及ぼす影響」,日本体育協会スポーツ科学研究報告集,2002,161-172
30. 霜島広樹,木村和彦(2013),「参加動機が観戦意図に与える影響についての検討—テニスを事例として—」,スポーツ科学研究,10,12-25
31. 杉山康司,鈴木理恵,祝原豊,鈴木隆幸(2008),「保護者アンケート及び体力テスト結果からみた小学校低学年向け運動教室の有効性」,国立青少年教育振興機構研究紀要,8,91-102
32. 高井和夫(2005),「子どもの身体活動を支える要因とその方策」,『教育学部紀要』文教大学教育学部 第39集,43-50
33. 武田 正司,(2005),「児童における体力と運動有能感との関係」『盛岡大学紀要』22, 41-47.
34. 田島良輝(2003),「スポーツ価値意識のパターンとその関連要因について～フィットネスクラブと地域スポーツクラブの調査より～」,人間・エイジング・社会 (5), 61-78,
35. 谷幸子,中比呂志,山下秋二,清田美絵(2003),「障害者スポーツボランティアの類型化に関する研究:活動期待の視点から」,体育・スポーツ経営学研究,18
36. 田部井明美(2001),「SPSS 完全活用法 共分散構造分析(AMOS)によるアンケート処理」東京図書
37. 中央教育審議会答申(2002),「子どもの体力向上のための総合的な方針について(答申)」
38. 手塚美奈(2007),「Jリーグクラブのサッカースクール会員保護者の観戦行動に関する研究-横浜・F・マリノスに注目して-」,早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文
39. 中井隆司,松良綾子(2005)「保育場面に表出する幼稚園教諭の指導理念」,教育実践総合センター研究紀要,14,11-20
40. 中西純,鈴木和弘,鈴木宏哉(2011),「授業時数の増加が中学生の体力向上に及ぼす影響:縦断データによる長期追跡」,発達発育研究,51,27-36
41. 中西純司(2012),「文化としてのスポーツ」の価値,人間福祉学研究,第5巻第1号,7-24
42. 中村和彦(2004),「子どものからだは危ない!」,日本標準
43. 永吉宏英,塚本真也,中大路哲(1986),「日本人のスポーツ価値意識の分析—体育大学生を事例として—」,大阪体育大学紀要,第17巻,87-95
44. 日本学術会議 健康・生活科学委員会 健康・スポーツ科学分科会(2011),提言「子どもを元気にする運動・スポーツの適正実施のための基本方針」
45. 波多野義郎,山田俊大,久下浩史,藤川秋子(2006),「親の意識は子どもの健康体力関連行動意識にどう関与するか」,九州保健福祉大学研究紀要,7,45-51
46. 久崎考浩,石山貴章(2012),「スポーツに参加する子どもの真実的発達に及ぼす大人の影響:その研究動向と今後の方向性」応用障害院理学研究,第11号,45-66
47. 「福岡県子どもの体力向上広場」(<http://www.kodomo-tairyoku.pref.fukuoka.lg.jp/>)(2

[013年1月9日アクセス](#))

48. 松平宗之,高井和夫(2010),「子どもの運動意欲を支える心理社会的要因,文教大学教育学部」,44,129-142
49. 松永淳一,有田畝広(2006)「心を育む体育授業の研究」,長崎大学教育学部紀要,46,119-126
50. 水上博司,高橋義雄,山口晶永,山下則之(2000)「スポーツスクールに子どもを通わせる保護者の期待に関する研究—名古屋グランパスエイトと明和町スポーツ少年団の比較—」,スポーツ産業学研究,10,59~73
51. 見田宗介(1966),価値意識の理論,弘文堂,pp14-47
52. 三戸範之(2003),「大学生のスポーツの価値観に関する研究」,秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学部門,49~55
53. 三村寛一,泉尾貢,小川弘恭,姫野國廣,安部恵子,檀上弘晃,塩野祐也,上田真也(2007),「子どもの体力向上プログラムの開発に関する研究【I】」,大阪教育大学研究紀要第IV部門,第56巻1号,113-121
54. 村木紘子(2004),「母親の能力・努力に対する価値意識と目標志向性が養育行動に及ぼす影響—動機づけ的な観点から—」,お茶の水女子大学 発達心理学紀要,第6巻,93-103
55. 文部科学省(2009),「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」
56. 文部科学省(2010),「平成22年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果」
57. 文部科学省(2012),「スポーツ振興基本計画」
58. 文部科学省(2012)「平成24年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果」
59. 文部科学省(2012),子どもの体力向上のための取組ハンドブック」
60. 文部科学省,「子どもの体力向上ホームページ」
61. 八代勉・中村平(2002)「体育・スポーツ経営学講義」,大修館書店
62. 読売新聞,2013年12月17日朝刊,「五輪ボランティア育成 通訳や誘導8万人 政府方針」,2013.12.17朝刊,東京朝刊一面,(1p)
63. 若吉浩二、高橋豪仁、今枝和与、岸田瑠、長谷川芳彦、石川元美、田辺正友(2005)「小学生児童における運動能力・運動習慣の経年的変化」,奈良教育大学紀要,第54巻第2号,39-47

資料Ⅰ：予備調査アンケート用紙

多摩・島しょスポーツ振興助成事業 府中市子ども体力チャレンジ事業 アンケート 記入ご協力をお願い

府中市、早稲田大学スポーツ科学学術院スポーツ経営学研究室

このアンケート調査は、府中市、府中市スポーツ推進委員によって行われる多摩・島しょスポーツ振興助成事業「府中市子ども体力チャレンジ」の実施校として選ばれた小学校の保護者の方を対象に、子どもたちの体、そして、心の発達に役立てるために行うアンケートです。未来を担う子供たちのために、ご協力ください。個々の成績の評価ではありませんのでご安心いただき、ありのままをお答えください。

なお、個人情報保護法に基づき、ご回答いただいた保護者の方やお子様の個人情報は第三者へ譲渡されることはありません。

年 組 番 男・女

お子様のご兄弟の数 () 名 末子の年齢 () 歳

※なお、ここのアンケートでお聞きする「運動」は野球やサッカーといった種目だけでなく、近所の散歩、ランニングや、公園や校庭で行うような鬼ごっこやかくれんぼなどの遊びも含める広い意味での身体活動や、身体を動かす遊びのことを言います。

《お子様のことについてお尋ねします。》

問1. 一緒に住んでいるご家族すべてに○をつけてください。(兄弟姉妹はその人数を書いてください)

(1).父 (2).母 (3).祖父 (4).祖母 (5).兄 () 人
(6).姉 () 人 (7).弟 () 人 (8).妹 () 人

問2. お子様ที่寝る時刻は平均してだいたい午後何時ごろですか

() 時 () 分

問3. お子様が起床する時刻は平均してだいたい午前何時ごろですか

() 時 () 分

問4. お子様が運動を実施する頻度はどのくらいですか (学校での体育の授業を除く)

週 () 日

※問5から問8は、問4で週1日以上運動すると回答した人だけお答えください。

問5. 平日の1日の運動実施時間 (身体を動かして遊ぶ時間) (学校での体育の授業を除く)

() 時間 () 分

問6. 平日のお子様の遊びは室内と戸外とどちらが多いですか

(1).室内での遊びが非常に多い (2).室内での遊びの方が少し多い
(3).どちらも同じくらい (4).戸外での遊びの方が少し多い (5).戸外での遊びが非常に多い

問7. 休日の1日の運動実施時間

() 時間 () 分

問8. 休日のお子様の遊びは室内と戸外とどちらが多いですか

- | | |
|------------------|-------------------|
| (1).室内での遊びが非常に多い | (2).室内での遊びの方が少し多い |
| (3).どちらも同じくらい | (4).戸外での遊びの方が少し多い |
| (5).戸外での遊びが非常に多い | |

問9. 平日における1日のテレビやDVDの視聴時間、TVゲーム、携帯ゲームをする時間は平均してどれくらいですか
() 時間 () 分

問10. 休日における1日のテレビやDVDの視聴時間、TVゲーム、携帯ゲームをする時間は平均してどれくらいですか
() 時間 () 分

問11. 朝ごはんは食べますか

- | | | | |
|----------|--------------|---------------|-------------|
| (1)毎日食べる | (2)食べる日の方が多い | (3)食べない日の方が多い | (4)ほとんど食べない |
|----------|--------------|---------------|-------------|

問12. ご家族と一緒に運動はどれくらいしますか

週 () 日

問13. 一緒に運動している家族の方全てに○をつけてください。(※問12で1日以上と回答した方のみお答えください)

- | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|------|------|------|------|------------|
| (1)父親 | (2)母親 | (3)祖父 | (4)祖母 | (5)兄 | (6)弟 | (7)姉 | (8)妹 | (9)その他 () |
|-------|-------|-------|-------|------|------|------|------|------------|

《回答していただいている保護者の方自身へお尋ねします。》

問14. この調査書を回答している方はお子様とどのようなご関係ですか

- | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|------------|
| (1)父親 | (2)母親 | (3)祖父 | (4)祖母 | (5)その他 () |
|-------|-------|-------|-------|------------|

問15. 保護者の方の中学校、高等学校時代の運動部活動について

- | |
|-------------------------------|
| (1)運動部に所属していた(半年以上は継続した) |
| (2)運動部には所属していなかった又は半年未満の所属だった |

問16. 保護者の方自身の体力の現状について

- | | | |
|-------------|-------------|-------------|
| (1)体力に自信がある | (2)体力は普通である | (3)体力に不安がある |
|-------------|-------------|-------------|

問17. 保護者の方の最近1年間の運動実施頻度 ※この1年間に行った運動を行った日数を全部合わせた日数についてご回答ください。

- | | | |
|-------------|-----------|-----------------------|
| (1)週に3日以上 | (2)週に1～2日 | (3)月に1～3日 |
| (3)3か月に1～2日 | (4)年に1～3日 | (5)この一年間運動やスポーツはしなかった |

問18. 1日の運動時間について

- | | | |
|----------------|-------------------|-------------------|
| (1)2時間以上 | (2)2時間未満～1時間30分以上 | (3)1時間30分未満～1時間以上 |
| (4)1時間未満～30分以上 | (5)30分未満 | |

問19. どの程度運動やスポーツを楽しんでいますか

- | | | |
|--------------------|-------------------|------------|
| (1)とても楽しんでいる | (2)どちらかというと楽しんでいる | (3)どちらでもない |
| (4)どちらかというと楽しんでいない | (5)全く楽しんでいない | |

問20. お子様がスポーツをすることはどの程度重要だと考えていますか

- | | | |
|------------------|------------------|------------|
| (1)とても重要である | (2)どちらかというと重要である | (3)どちらでもない |
| (4)どちらかというと重要でない | (5)全く重要でない | |

問21. お子様の体力低下に危機感を感じていますか

- | | | |
|-------------------|----------------|------------|
| (1)感じた | (2)どちらかというと感じた | (3)どちらでもない |
| (4)どちらかというと感じなかった | (5)感じなかった | |

問22. あなたのお子様がスポーツをすることで期待されることに関して、「5.強く思う～1.全く思う」の5つの中から最も近い番号を一つ選んでお答えください。

※なお、ここでいう「運動・スポーツ」は野球やサッカーといったものだけでなく、おにごっこやかかけっこといった学校での体育を除いた広い意味での身体活動や、体を動かす遊びのことを言います。

	5強く思う～1全く思わない
1. 運動・スポーツは根気を育てる	5—4—3—2—1
2. 運動・スポーツをすることは達成感を与える	5—4—3—2—1
3. スポーツ大会やイベントの運営をサポートすることは社会性を育てる	5—4—3—2—1
4. 運動・スポーツは新しい友達を作るきっかけとなる	5—4—3—2—1
5. 他の年代の子に運動・スポーツを教えることは子ども同士の関わりを深める	5—4—3—2—1
6. 運動・スポーツは責任感を育てる	5—4—3—2—1
7. スポーツ大会やイベントの運営をサポートすることは社会貢献を経験させる	5—4—3—2—1
8. 運動・スポーツは協調性を育てる	5—4—3—2—1
9. 運動・スポーツは心身の健全な発達に寄与する	5—4—3—2—1
10. 運動・スポーツをすることで礼儀を学べる	5—4—3—2—1
11. 運動・スポーツは健康の保持増進に良い影響を与える	5—4—3—2—1
12. スポーツチームやクラブの運営をサポートすることは様々な人と交流できる	5—4—3—2—1
13. 運動・スポーツはストレスの発散になる	5—4—3—2—1
14. 運動・スポーツは生活の質を向上させる	5—4—3—2—1
15. 運動・スポーツを見ることは感動を与える	5—4—3—2—1
16. 運動・スポーツをすることは充実感を与える	5—4—3—2—1
17. スポーツチームやクラブの運営をサポートすることは社会貢献を経験させる	5—4—3—2—1
18. 運動・スポーツは豊かな人間性の醸成に良い影響を与える	5—4—3—2—1
19. 運動・スポーツは健全な育成に良い影響を与える	5—4—3—2—1
20. 運動・スポーツで獲得する技術には価値がある	5—4—3—2—1
21. 運動・スポーツを見ることは夢を与える	5—4—3—2—1
22. 他の年代の子に運動・スポーツを教えることは社会性を育てる	5—4—3—2—1
23. 運動・スポーツは体力の保持増進に良い影響を与える	5—4—3—2—1
24. 運動・スポーツは楽しさを生み出すものである	5—4—3—2—1
25. 運動・スポーツはコミュニケーション能力を育てる	5—4—3—2—1
26. 運動・スポーツは地域への愛着を深める	5—4—3—2—1
27. 運動・スポーツは自身の可能性を試す	5—4—3—2—1
28. 運動・スポーツをすることは人間としての根源的な欲求を充たすものである	5—4—3—2—1
29. 他の年代の子に運動・スポーツを教えることは子ども同士が協力し合う場面を生み出す	5—4—3—2—1
30. 運動・スポーツをすることで年代の異なる人と交流できる	5—4—3—2—1
31. 運動・スポーツは自然と触れ合える	5—4—3—2—1
32. 運動・スポーツを見ることはスポーツへの関心を高める	5—4—3—2—1
33. スポーツチームやクラブの運営をサポートすることは社会性を育てる	5—4—3—2—1
34. 運動・スポーツは社会性を養う	5—4—3—2—1
35. 運動・スポーツは人間らしく生きていくためには必要な活動である	5—4—3—2—1
36. スポーツ大会やイベントの運営をサポートすることで様々な人と交流できる	5—4—3—2—1
37. 運動・スポーツをすることは爽快感を与える	5—4—3—2—1

38. 他の年代の子に運動・スポーツを教えることは思いやりの心を育てる	5—4—3—2—1
39. 運動・スポーツは自律心を育てる	5—4—3—2—1
40. 運動・スポーツは責任感を身につけられる	5—4—3—2—1

問23. あなたのお子様が活発に体を動かすように促す行動についてあなた自身がどのようにお考えですか。それぞれの行動について「4.大いに賛成～1.全く反対」の4つの中から最も近い番号を一つ選んでお答えください。

※なお、ここでいう「運動」や「スポーツ」は野球やサッカーといったものだけでなく、おにごっこやかけっこといった学校での体育を除いた広い意味での身体活動や、体を動かす遊びのことを言います。

	4大いに賛成～1全く反対
1. サッカー、バスケットボールのようなクラブやスポーツチームに子どもを入れる	4—3—2—1
2. 自分自身が子どものお手本となり、リードすることで子どもが活発に体を動かすように奨励する	4—3—2—1
3. 子どもが自分の部屋でテレビを見ることを許可する	4—3—2—1
4. 自分自身が定期的に運動・スポーツを行い、活発に体を動かす	4—3—2—1
5. 活発に体を動かすようにピクニックや遠出をする	4—3—2—1
6. 自分自身が運動・スポーツをする場合、子どもと一緒に行動	4—3—2—1
7. 活発に体を動かすようなゲームやおもちゃや道具を子どもに買う	4—3—2—1
8. 子どもが宿題以外でパソコンを使うことのできる時間を制限する	4—3—2—1
9. 子どもが運動・スポーツをする、あるいは活発に体を動かすのを見る	4—3—2—1
10. 子どもが活発に体を動かすよう、地域のクラブ(ボーイスカウトやガールスカウトなど)に入れる	4—3—2—1
11. 子どもがTVやDVD(教育的かどうか関わらず)を一日に見ることのできる時間を制限する	4—3—2—1
12. 天気の良い日に子どもが室内にいることはよくない	4—3—2—1
13. 活発に体を動かすようになれる場所まで子どもを連れて行く	4—3—2—1
14. 子どもがテレビゲーム(携帯ゲームも含む)をする時間を制限する	4—3—2—1
15. 活発に体を動かせるような近所の公園や学校などを使うように子どもに奨励する	4—3—2—1
16. 子どもが自分の部屋にパソコンを置くことを許可する	4—3—2—1
17. 学校以外で子どもが活発に体を動かせる方法(課外活動やサマーキャンプなど)を見つける	4—3—2—1
18. 天気の良いときに子どもが外で遊ぶように奨励する	4—3—2—1
19. 自分自身が運動・スポーツを楽しむ	4—3—2—1
20. 子どもの年齢に適切な距離で安全な場合、近所で自転車に乗ることや歩くことを子どもに奨励する	4—3—2—1
21. 子どもに携帯電話を使う時間を制限する	4—3—2—1

質問は以上になります。

お忙しい中、調査に多大な協力を賜り心より感謝申し上げます。

資料Ⅱ：本調査アンケート用紙(一般的価値意識)

多摩・島しょスポーツ振興助成事業 府中市子ども体力チャレンジ事業

アンケート 記入ご協力のお願い

府中市、早稲田大学スポーツ科学学術院スポーツ経営学研究室

このアンケート調査は、府中市、府中市スポーツ推進委員によって行われる多摩・島しょスポーツ振興助成事業「府中市子ども体力チャレンジ」の実施校として選ばれた小学校の保護者の方を対象に、子どもたちの体、そして、心の発達に役立てるために行うアンケートです。未来を担う子供たちのために、ご協力ください。個々の成績の評価ではありませんのでご安心いただき、ありのままをお答えください。

なお、個人情報保護法に基づき、ご回答いただいた保護者の方やお子様の個人情報は第三者へ譲渡されることはありません。

年 組 番 男・女

お子様のご兄弟の数 () 名 末子の年齢 () 歳

※なお、このアンケートでお聞きする「運動」は野球やサッカーといった種目だけでなく、近所の散歩、ランニングや、公園や校庭で行うような鬼ごっこやかくれんぼなどの遊びも含める広い意味での身体活動や、身体を動かす遊びのことを言います。

《お子様のことについてお尋ねします。》

問1. 一緒に住んでいるご家族すべてに○をつけてください。(兄弟姉妹はその人数を書いてください)

(1).父 (2).母 (3).祖父 (4).祖母 (5).兄 () 人
(6).姉 () 人 (7).弟 () 人 (8).妹 () 人

問2. お子様がお寝る時刻は平均してだいたい午後何時ごろですか

() 時 () 分

問3. お子様がお寝る時刻は平均してだいたい午前何時ごろですか

() 時 () 分

問4. お子様がお運動を実施する頻度はどのくらいですか (学校での体育の授業を除く)

週 () 日

※問5から問8は、問4で週1日以上運動すると回答した人だけお答えください。

問5. 平日の1日の運動実施時間(身体を動かして遊ぶ時間)(学校での体育の授業を除く)

() 時間 () 分

問6. 平日のお子様の遊びは室内と戸外とどちらが多いですか

(1).室内での遊びが非常に多い (2).室内での遊びの方が少し多い
(3).どちらも同じくらい (4).戸外での遊びの方が少し多い (5).戸外での遊びが非常に多い

問7. 休日の1日の運動実施時間

() 時間 () 分

問8. 休日のお子様の遊びは室内と戸外とどちらが多いですか

(1).室内での遊びが非常に多い (2).室内での遊びの方が少し多い
(3).どちらも同じくらい (4).戸外での遊びの方が少し多い (5).戸外での遊びが非常に多い

問9. 平日における1日のテレビやDVDの視聴時間、TVゲーム、携帯ゲームをする時間は平均してどれくらいですか

() 時間 () 分

問10. 休日における1日のテレビやDVDの視聴時間、TVゲーム、携帯ゲームをする時間は平均してどれくらいですか

() 時間 () 分

問11. 朝ごはんは食べますか

(1)毎日食べる (2)食べる日の方が多い (3)食べない日の方が多い (4)ほとんど食べない

問12. ご家族と一緒に運動はどれくらいしますか

週（ ）日

問13. 一緒に運動している家族の方全てに○をつけてください（※問12で1日以上と回答した方のみお答えください）

(1)父親 (2)母親 (3)祖父 (4)祖母 (5)兄 (6)弟 (7)姉 (8)妹 (9)その他（ ）

《回答していただいている保護者の方自身へお尋ねします。》

問14. この調査書を回答している方はお子様とどのような関係ですか

(1)父親 (2)母親 (3)祖父 (4)祖母 (5)その他（ ）

問15. 保護者の方の中学校、高等学校時代の運動部活動について

(1)運動部に所属していた（半年以上は継続した）
(2)運動部には所属していなかった又は半年未満の所属だった

問16. 保護者の方自身の体力の現状について

(1)体力に自信がある (2)体力は普通である (3)体力に不安がある

問17. 保護者の方の最近1年間の運動実施頻度 ※この1年間に行った運動を行った日数を全部合わせた日数についてご回答ください。

(1)週に3日以上 (2)週に1～2日 (3)月に1～3日
(3)3か月に1～2日 (4)年に1～3日 (5)この一年間運動やスポーツはしなかった

問18. 1日の運動時間について

(1)2時間以上 (2)2時間未満～1時間30分以上 (3)1時間30分未満～1時間以上
(4)1時間未満～30分以上 (5)30分未満

問19. どの程度運動やスポーツを楽しんでいますか

(1)とても楽しんでいる (2)どちらかというと楽しんでいる (3)どちらでもない
(4)どちらかというと楽しんでいない (5)全く楽しんでいない

問20. お子様がスポーツをすることはどの程度重要だと考えていますか

(1)とても重要である (2)どちらかというと重要である (3)どちらでもない
(4)どちらかというと重要でない (5)全く重要でない

問21. お子様の体力低下に危機感を感じていますか

(1)感じた (2)どちらかというと感じた (3)どちらでもない
(4)どちらかというと感じなかった (5)感じなかった

問22. あなたのお子様がスポーツと関わることで子供に期待されることに関して、「7. 全くそう思う 6. かなりそう思う 5. ややそう思う 4. どちらともいえない 3. ややそう思わない 2. かなりそう思わない 1. 全くそう思わない」の5つの中から最も近い番号を一つ選んでお答えください。

※なお、ここでいう「運動・スポーツ」は野球やサッカーといったものだけでなく、おにごっこやかけっこといった学校での体育を除いた広い意味での身体活動や、体を動かす遊びのことを言います。

	全く そう 思う	かなり そう 思う	やや そう 思う	ど ち ら と も い え な い	やや そう 思 わ な い	かなり そう 思 わ な い	全く そう 思 わ な い
(例) 自分の子どもにとって運動・スポーツは根気を育てるものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは根気を育てるものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは新しい友達を作るきっかけとなる	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは責任感を育てるものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは協調性を育てるものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは心身の健全な発達に寄与するものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは健康の保持増進に良い影響を与えるものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツはストレス発散になる	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは生活の質を向上させるものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは豊かな人間性の醸成に良い影響を与えるものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは健全な育成に良い影響を与えるものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツで獲得する技術は価値がある	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは体力の保持増進に良い影響を与えるものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは楽しさを生み出すものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツはコミュニケーション能力を育てるものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは地域への愛着を深める	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは子ども自身の可能性を試すものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは自然と触れ合えるものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは社会性を養うものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは人間らしく生きていくために必要な活動である	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもにとって運動・スポーツは自律心を育てるものである	7	6	5	4	3	2	1

問23. あなたのお子様が活発に体を動かすように促す行動についてあなた自身がどのようにお考えですか。それぞれの行動について「4.大いに賛成～1.全く反対」の4つの中から最も近い番号を一つ選んでお答えください。

※なお、ここでいう「運動」や「スポーツ」は野球やサッカーといったものだけでなく、おにごっこやかけっこといった学校での体育を除いた広い意味での身体活動や、体を動かす遊びのことを言います。

	4大いに賛成～1全く反対
サッカー、バスケットボールのようなクラブやスポーツチームに子どもを入れる	4—3—2—1
自分自身が子どものお手本となり、リードすることで子どもが活発に体を動かすように奨励する	4—3—2—1
自分自身が定期的に運動・スポーツを行い、活発に体を動かす	4—3—2—1
活発に体を動かすようにピクニックや遠出をする	4—3—2—1
自分自身が運動・スポーツをする場合、子どもと一緒に行動	4—3—2—1
子どもが宿題以外でパソコンを使うことのできる時間を制限する	4—3—2—1
子どもが運動・スポーツをする、あるいは活発に体を動かすのを見る	4—3—2—1
子どもがTVやDVD(教育的かどうか関わらず)を一日に見ることのできる時間を制限する	4—3—2—1
活発に体を動かすようになれる場所まで子どもを連れて行く	4—3—2—1
子どもがテレビゲーム(携帯ゲームも含む)をする時間を制限する	4—3—2—1
活発に体を動かせるような近所の公園や学校などを使うように子どもに奨励する	4—3—2—1
学校以外で子どもが活発に体を動かせる方法(課外活動やサマーキャンプなど)を見つける	4—3—2—1
自分自身が運動・スポーツを楽しむ	4—3—2—1
子どもの年齢に適切な距離で安全な場合、近所で自転車に乗ることや歩くことを子どもに奨励する	4—3—2—1
子どもに携帯電話を使う時間を制限する	4—3—2—1

質問は以上になります。

お忙しい中、調査に多大な協力を賜り心より感謝申し上げます。

資料Ⅲ：本調査アンケート用紙(参与形態別価値意識)

多摩・島しょスポーツ振興助成事業 府中市子ども体力チャレンジ事業

アンケート 記入ご協力をお願い

府中市、早稲田大学スポーツ科学学術院スポーツ経営学研究室

このアンケート調査は、府中市、府中市スポーツ推進委員によって行われる多摩・島しょスポーツ振興助成事業「府中市子ども体力チャレンジ」の実施校として選ばれた小学校の保護者の方を対象に、子どもたちの体、そして、心の発達に役立てるために行うアンケートです。未来を担う子供たちのために、ご協力ください。個々の成績の評価ではありませんのでご安心いただき、ありのままをお答えください。

なお、個人情報保護法に基づき、ご回答いただいた保護者の方やお子様の個人情報は第三者へ譲渡されることはありません。

年 組 番 男・女

お子様のご兄弟の数 () 名 末子の年齢 () 歳

※なお、ここのアンケートでお聞きする「運動」は野球やサッカーといった種目だけでなく、近所の散歩、ランニングや、公園や校庭で行うような鬼ごっこやかくれんぼなどの遊びも含める広い意味での身体活動や、身体を動かす遊びのことを言います。

《お子様のことについてお尋ねします。》

問1. 一緒に住んでいるご家族すべてに○をつけてください。(兄弟姉妹はその人数を書いてください)

(1).父 (2).母 (3).祖父 (4).祖母 (5).兄 () 人
(6).姉 () 人 (7).弟 () 人 (8).妹 () 人

問2. お子様がお寝する時刻は平均してだいたい午後何時ごろですか

() 時 () 分

問3. お子様がお寝する時刻は平均してだいたい午前何時ごろですか

() 時 () 分

問4. お子様がお運動を実施する頻度はどのくらいですか (学校での体育の授業を除く)

週 () 日

※問5から問8は、問4で週1日以上運動すると回答した人だけお答えください。

問5. 平日の1日の運動実施時間(身体を動かして遊ぶ時間)(学校での体育の授業を除く)

() 時間 () 分

問6. 平日のお子様の遊びは室内と戸外とどちらが多いですか

(1).室内での遊びが非常に多い (2).室内での遊びの方が少し多い
(3).どちらも同じくらい (4).戸外での遊びの方が少し多い (5).戸外での遊びが非常に多い

問7. 休日の1日の運動実施時間

() 時間 () 分

問8. 休日のお子様の遊びは室内と戸外とどちらが多いですか

(1).室内での遊びが非常に多い (2).室内での遊びの方が少し多い
(3).どちらも同じくらい (4).戸外での遊びの方が少し多い (5).戸外での遊びが非常に多い

問9. 平日における1日のテレビやDVDの視聴時間、TVゲーム、携帯ゲームをする時間は平均してどれくらいですか

() 時間 () 分

問10. 休日における1日のテレビやDVDの視聴時間、TVゲーム、携帯ゲームをする時間は平均してどれくらいですか

() 時間 () 分

問11. 朝ごはんは食べますか

(1)毎日食べる (2)食べる日の方が多い (3)食べない日の方が多い (4)ほとんど食べない

問12. ご家族と一緒に運動はどれくらいしますか

週 () 日

問13. 一緒に運動している家族の方全てに○をつけてください (※問12で1日以上と回答した方のみお答えください)

(1)父親 (2)母親 (3)祖父 (4)祖母 (5)兄 (6)弟 (7)姉 (8)妹 (9)その他 ()

《回答していただいている保護者の方自身へお尋ねします。》

問14. この調査書を回答している方はお子様とどのような関係ですか

(1)父親 (2)母親 (3)祖父 (4)祖母 (5)その他 ()

問15. 保護者の方の中学校、高等学校時代の運動部活動について

(1)運動部に所属していた (半年以上は継続した)
(2)運動部には所属していなかった又は半年未満の所属だった

問16. 保護者の方自身の体力の現状について

(1)体力に自信がある (2)体力は普通である (3)体力に不安がある

問17. 保護者の方の最近1年間の運動実施頻度 ※この1年間に行った運動を行った日数を全部合わせた日数についてご回答ください。

(1)週に3日以上 (2)週に1~2日 (3)月に1~3日
(3)3か月に1~2日 (4)年に1~3日 (5)この一年間運動やスポーツはしなかった

問18. 1日の運動時間について

(1)2時間以上 (2)2時間未満~1時間30分以上 (3)1時間30分未満~1時間以上
(4)1時間未満~30分以上 (5)30分未満

問19. どの程度運動やスポーツを楽しんでいますか

(1)とても楽しんでいる (2)どちらかという楽しんでいる (3)どちらでもない
(4)どちらかという楽しんでいない (5)全く楽しんでいない

問20. お子様がスポーツをすることはどの程度重要だと考えていますか

(1)とても重要である (2)どちらかという重要である (3)どちらでもない
(4)どちらかという重要でない (5)全く重要でない

問21. お子様の体力低下に危機感を感じていますか

(1)感じた (2)どちらかという感じた (3)どちらでもない
(4)どちらかという感じなかった (5)感じなかった

問22. あなたのお子様がスポーツと関わることで子供に期待されることに関して、

「7.全くそう思う～1.全くそう思わない」の5つの中から最も近い番号を一つ選んでお答えください。

※なお、ここでいう「運動・スポーツ」は野球やサッカーといったものだけでなく

おにごっこやかけっこといった学校での体育を除いた広い意味での
身体活動や、体を動かす遊びのことを言います。

全くそう思わない
かなりそう思わない
ややそう思わない
どちらでもない
ややそう思う
かなりそう思う
全くそう思う

問 23-1.スポーツを「する」こととの関わりについて

(例) 自分の子どもが運動・スポーツをすることで根気が育てられる	7—6—5— <u>4</u> —3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることで根気が育てられる	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツすることは新しい友達を作るきっかけとなる	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツすることで責任感が育てられる	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツすることは人間らしく生きていくためには必要な活動である	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツすることは心身の健全な発達に寄与する	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることは健康の保持増進に良い影響を与える	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることはストレスの発散になる	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることは生活の質を向上させる	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることは豊かな人間性の醸成に良い影響を与える	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることは健全な育成に良い影響を与える	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることで獲得する技術には価値がある	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツすることは体力の保持増進に良い影響を与える	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツすることは楽しさを生み出すものである	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツすることでコミュニケーション能力を育てられる	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることは地域への愛着を深める	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることは子ども自身の可能性を試すものである	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることで自然と触れ合える	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることで社会性が養われる	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることで協調性が育てられる	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることで自律心を育てられる	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることは人間としての根源的な欲求を充たすものである	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることは子どもに爽快感を与える	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることは子どもに充実感を与える	7—6—5—4—3—2—1
自分の子どもが運動・スポーツをすることで年代の異なる人と交流できる	7—6—5—4—3—2—1

問 23-2.スポーツを「見る」こととの関わりについて

	全くそう思う	かなりそう思う	ややそう思う	どちらでもない	ややそう思わない	かなりそう思わない	全くそう思わない
自分の子どもが運動・スポーツを見ることは感動を与える	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもが運動・スポーツを見ることは夢を与える	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもが運動・スポーツを見ることは楽しさを生み出すものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもが運動・スポーツを見ることはストレスの発散になる	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもが運動・スポーツを見ることはスポーツへの関心を高める	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもが運動・スポーツを見ることは爽快感を与える	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもが運動・スポーツを見ることは健全な育成に良い影響を与える	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもが運動・スポーツを見ることでコミュニケーション能力を育てられる	7	6	5	4	3	2	1

問 23-3.スポーツを「支える」こととの関わりについて

	全くそう思う	かなりそう思う	ややそう思う	どちらでもない	ややそう思わない	かなりそう思わない	全くそう思わない
自分の子どもが運動・スポーツ場面でお手伝いをすることは社会性を養う	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもが運動・スポーツ場面でお手伝いをすることは社会貢献を経験できる	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもが運動・スポーツ場面でお手伝いをする事で様々な人と交流できる	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもが運動・スポーツ場面でお手伝いをする事はストレスの発散になる	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもが運動・スポーツ場面でお手伝いをする事は楽しさを生み出すものである	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもが運動・スポーツ場面でお手伝いをする事は爽快感を与える	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもが運動・スポーツ場面でお手伝いをする事は健全な育成に良い影響を与える	7	6	5	4	3	2	1
自分の子どもが運動・スポーツ場面でお手伝いをする事はコミュニケーション能力が育てられる	7	6	5	4	3	2	1

問23. あなたのお子様が活発に体を動かすように促す行動についてあなた自身がどのようにお考えですか。それぞれの行動について「4.大いに賛成～1.全く反対」の4つの中から最も近い番号を一つ選んでお答えください。

※なお、ここでいう「運動」や「スポーツ」は野球やサッカーといったものだけでなく、おにごっこやかけっこといった学校での体育を除いた広い意味での身体活動や、体を動かす遊びのことを言います。

	4大いに賛成～1全く反対
サッカー、バスケットボールのようなクラブやスポーツチームに子どもを入れる	4—3—2—1
自分自身が子どものお手本となり、リードすることで子どもが活発に体を動かすように奨励する	4—3—2—1
自分自身が定期的に運動・スポーツを行い、活発に体を動かす	4—3—2—1
活発に体を動かすようにピクニックや遠出をする	4—3—2—1
自分自身が運動・スポーツをする場合、子どもと一緒にやる	4—3—2—1
子どもが宿題以外でパソコンを使うことのできる時間を制限する	4—3—2—1
子どもが運動・スポーツをする、あるいは活発に体を動かすのを見る	4—3—2—1
子どもがTVやDVD(教育的がどうか関わらず)を一日に見ることのできる時間を制限する	4—3—2—1
活発に体を動かすようになれる場所まで子どもを連れて行く	4—3—2—1
子どもがテレビゲーム(携帯ゲームも含む)をする時間を制限する	4—3—2—1
活発に体を動かせるような近所の公園や学校などを使うように子どもに奨励する	4—3—2—1
学校以外で子どもが活発に体を動かせる方法(課外活動やサマーキャンプなど)を見つける	4—3—2—1
自分自身が運動・スポーツを楽しむ	4—3—2—1
子どもの年齢に適切な距離で安全な場合、近所で自転車に乗ることや歩くことを子どもに奨励する	4—3—2—1
子どもに携帯電話を使う時間を制限する	4—3—2—1

質問は以上になります。

お忙しい中、調査に多大な協力を賜り心より感謝申し上げます。

謝辞

修士論文の執筆にあたり、まず、指導教官の木村和彦先生に御礼申し上げます。木村先生には大学2年生の時からご指導いただき、大変お世話になりました。TA等でゼミ以外の時間にも一緒に過ごす機会が多く、先生のお陰でとても充実した2年間を過ごすことができました。ゼミの発表では、1人で2時間近くアドバイスを頂いたことは1度や2度ではなく、たくさんご迷惑もおかけ致しました。しかし、そういった経験を経て成長することができたと実感しております。木村先生には大変感謝しております。

そして、副査を引き受けて頂いた作野誠一先生、中村好男先生にも御礼申し上げます。作野先生にはサブゼミや大学院ゼミ等でもご指導して頂いたり、多くの研究のアドバイスを頂くなど、大変感謝しております。

ゼミやいつもご指導を賜りました霜島広樹さん、石井十郎さん、醍醐笑部さん、林子郁さん、望月拓実さんにも御礼申し上げます。ゼミの時間はもちろん、ゼミ以外の時間でも大変お世話になりました。また、昨年度卒業された甲賀輝さん、田中惟さんにも大変お世話になりました。発表する度に鋭いご指摘を頂き、成長することができました。

研究室で唯一の同期であった斉藤麗さんにもお礼申し上げます。お互いに部活動のコーチをしながらの大学院生活でしたが、斉藤さんには本当に助けてもらいました。博士課程でのご活躍を期待しております。

また、本研究に協力していただきましたF市市役所の皆様、F市スポーツ推進委員の皆様、そして小学校の教員、保護者の方にも大変感謝しております。学校との連絡を取って頂いたり、質問紙の配布方法や時期について調整をしていただき、本当にありがとうございました。この場を借りて心より御礼申し上げます。

そして、2年間コーチとして携わらせて頂いた、早稲田大学ラグロス部の皆様にも大変感謝しております。みんなの頑張る姿は、研究のモチベーションになっていました。2年ぶり3回目のインカレ制覇おめでとうございます。インカレ優勝、新人戦優勝、Bリーグ優勝など、2年間で本当にかげがえのない時間を過ごさせてもらいました。来年以降のご活躍を期待しております。

最後に、普段はなかなか言い表すことができませんが、いつも支えてくれる家族には感謝しています。家族の支えがあつてここまでこれたと思います。ほんとうにありがとうございます。これからも、体につけて元気にお過ごしください。

2014年1月10日 木村圭佑